

ヘンリー・フィールディングの小説 『トム・ジョーンズ』

児 玉 啓 介

1. はじめに

「人文」第19号から第22号まで4回にわたって、「ヘンリー・フィールディングの小説『トム・ジョーンズ』の本質」というタイトルで論述したが、本論文は彼のこの作品の特質を抄出するものである。フィールディングの『トム・ジョーンズ』はどんな小説かという質問に対する簡潔な回答になれば幸いである。

『トム・ジョーンズ』は1749年に出版され、イギリスの最初の長編小説と考えられ、全体のための芸術的統一を確保する計画に基づいて書かれ、健全で人間的な本である。

フィールディングはジョージ・リトルトン卿への献辞の中で次のように言っている。

「私が読者に期待したいのは、この作品の正にその入口で、全体の流れの中、宗教と美徳の教義に反するもの、上品さの最も厳密な諸規則と矛盾するもの、熟読する際に最も純真な眼さえ傷つけるものは何も発見しないということ。逆に、善良さと純真無垢を推薦することがこの作品の中での私の誠実な努力であったことを断言する。この正直な目的を私が達成したと考えてほしいし、実を言えば、この種の本の中で目的が最もよく達成されているようである。というのは実例は一種の絵であり、その絵の中で美徳が、言わば、視覚の対象であり、あの美しさ（プラトンが美徳の赤裸々な魅力の中にあると主張する美しさ）の考えで私達の心を打つからである。

人類の賞讃を受ける美徳の美しさを提示するほかに、真実の関心が人々を美徳の追求に向かわせるのだと強調することによって、美徳のための人間的行為にもっと強い動機を与えようと私は試みた。この目的のために、罪を重ねることは、純真無垢と美徳の確かな友である心のしっかりした内的慰めの償いをするにはできないし、罪が私達の胸の中へ招き入れる恐怖と心配の悪と全然釣合いをとることはできないと私は証明して来た。そしてまた、このような修得はそれ事態一般的に価値はないし、修得の手段は下品で悪名高いだけでなく、よくてもせいぜい不確かであり、いつも危険にみちているということ。最後に、美徳と純真無垢は無分別による以外にほとんど傷つくことはないし、この無分別だけが美徳と純真無垢を裏切り、偽りと邪悪が広げる罠にかけるということを強く説く努力をして来た。私が教義としてもっと熱心に努力して来た教訓は最も成功しているようである。というのは善良な人を賢明にする方が邪悪な人を善良にするよりずっと易しいと信じるからである。

このような目的のために私の得意とする機知とユーモアを全部以下の作品の中で採用した。その中では人間を笑い飛ばして彼らの好きな諸愚と諸悪をしないように努力して来た。この善

意の試みにどのくらい成功したかは率直な読者にまかせるが、ただ二つだけ願いがある。その一つは、この作品の中で完璧を期待しないこと。もう一つは作品のあちこちでメリット（価値）がなくてもそれを赦すこと。」

また、フィールディングは2巻1章（以下2-1と省略）で読者に次のことを希望している。

「この作品の中である章は短かく、ある章は長い、また期間がたった1日だったり、何年もだったりするが、一言でいうと、この物語がある時はじっとしているように思われたり、ある時は飛ぶように思われても、読者諸賢は驚かないでほしい。というのは私は実際著述の新しい領域の創始であり、私の好きなどんな法律でも自由に作ることができるからであるし、これらの法律を読者は信じて従ってほしいからである。」

さらに、フィールディングは4-1でこの作品を「英雄的、歴史的、散文詩的」であり、「これは悲劇詩人によく知られ、十分実行されている手法である。というのは詩人は聴衆の心を主役登場のために準備させるからである」と言う。

最後に、フィールディングは5-1でこの作品を書き進めて行く中で、「散文的、喜劇的、叙事詩的著述全体の中で守る必要のある規則として理由を書きとめるだけで十分である」と言っている。

以上フィールディングが『トム・ジョーンズ』を書く際の心構えまたは意図を紹介した。

2. 登場人物とその人となり

『トム・ジョーンズ』という作品の中に登場する主要な人物は全部でおよそ55人であるが、この中で最も重要な人物を5人即ちトム・ジョーンズ、ソフィア・ウェスタン嬢、オールワージー氏、ブリフィル、ウェスタン氏を紹介する。

(1) トム・ジョーンズ

(a) オールワージー氏はある特別な用事でロンドンを3か月ぐらい留守していたが、ある晩おそく帰って来て妹と食事をして、自分の部屋にはいって、ベッドにはいろいろとして衣服をあけてみたら、シーツの間にスヤスヤ眠っている粗末に産着にくるまっている赤ん坊を見つけた。その赤ん坊は鮮やかな色合いをしていて、純真無垢の美しさを表わしていた。

これがオールワージー氏とこの物語の主人公トム・ジョーンズとの運命的な出会いである。

(注)
(IV-1) (1-3)

(c) オールワージー氏は名付け親になって可愛い捨て子に自分の名前のトーマスをつけて、育児室に1日少くとも1度は行ってトーマス（トム）を見て可愛がった(IV-1) (2-2)。

(e) ある日ジョーンズがあひる一羽とりんごを沢山盗んだことがばれるが、それらを自分で

(注) (IV-1) は「人文」第19号、(IV-2) は20号、(IV-3) は21号、(IV-4) は22号の各項を意味する。

食べたのではなく、ジョージ・シーグリムにプレゼントしたのだった。というのはシーグリム一家が貧しくて困っているのを見るに見かねて、義侠心からしたまでのことだった。盗むといういわゆる罪の意識はなかったのであるが、すべての苦痛とすべての非難を彼だけが耐えることになった(Ⅳ-1) (3-1)。

(f) トムが盗みを働いたことで勇敢な少年、愉快的奴、正直者という称号を与えられた。トムのブラック・ジョージ(狩猟番)に対する振舞いが召使いたちの間ではもてはやされた。というのはジョージは以前は鼻つまみであったが、オールワージー氏から追い出されると、いたる所で同情されたし、トム・ジョーンズの友情と勇敢さが最高の相手で召使いたち全部によって祝福されたのだった(Ⅳ-1) (3-3)。

(g) 哲学者のスクエアと牧師のスワッカムがトムとブリフィルを比較する場面で、

トムは彼の主人であるスワッカムが近づいて来る時、帽子を脱いだり、札をしたりすることをしょっちゅう忘れて、尊敬の態度を欠いているだけでなく、主人の教訓と事例に全く無頓着である。実に思慮のないわつした若者で、その態度にほとんど真面目さがなく、ましてや彼の表現には真面目さがなく、彼の仲間のブリフィルの真面目な振舞いを横柄に下品にあざ笑ったものである(Ⅳ-1) (3-3)。

(h) オールワージー氏の眼にはトムとブリフィル(氏の妹の息子即ち甥)と比較すると、トムは悪ふざけ、乱暴、注意力の足りなさによって、不運な少年に写る(Ⅳ-1) (3-7)。

(j) トムはソフィアに対してはほかの人に対してよりも高い尊敬の念をもって振る舞ったが、それはやはり彼女の美しさ、運のよさ、センス、優しい態度があったからで、彼女の体には関心はなかった(Ⅳ-1) (4-5)。

(k) この若い紳士(ジョーンズ)はソフィアのいろいろな魅力を意識していないのではなかったし、彼女のほかの資質も全部尊敬していたが、彼の心に深い印象を全然与えていなかったのだからである(Ⅳ-1) (4-6)。

(l) ジョージ・シーグリム、俗称ブラック・ジョージ(狩猟番)の5人の子供の2番目の娘であるモリーが16歳になるまで、彼女の美しさはトムに全然印象を与えなかった。彼女の体より美しさに愛情を感じていた。というのは若い女を誘惑することは、その身分がどんなに低くても、彼には非常に憎むべき罪に見えたからだし、モリーの父には善意を持っていたし、家族には同情していたし、真面目な考えを強く持っていたからである(Ⅳ-1) (4-6)。

(m) モリーとジョーンズの駆け引きは、モリーの方が一枚上であるのに、ジョーンズ自身は自分の方がうまいと思っている。というのは自分は世界で一番ハンサムな青年だと思っているからである(Ⅳ-1) (4-6)。

(p) モリーが教会の境内で会衆と大乱闘をしている場面にたまたま出会った時、

トムは狂人のように叫び、胸をたたき、髪をかきむしり、地面を踏み鳴らし、関係者全

部に対する最高の復讐を誓った。彼はコートを脱ぎ、それを彼女にかけてやり、彼の帽子を彼女の頭にかぶせ、ハンカチでできるだけきれいに彼女の顔から血をふきとった。そして、彼女を無事に連れ帰るために、召使いに鞍を取りに帰るよう叫んだ(IV-1) (4-8)。

(r) トムがオールワージー氏に罪の告白をする場面で、

モリーが生んだ子の父は私です。あの可哀相な女に同情して下さい。もしこの場合何かの罪があるとすれば、それは専ら私の責任だと考えて下さいと言う(IV-1) (4-11)。

(s) オナー夫人がソフィアに話している場面で、夫人は言う。

「ジョーンズさんは一番ハンサムな青年であると誰でも言います」と(IV-1) (4-12)。

(u) モリーの不貞を知って、ジョーンズの愛は同情へと変ったが、それでもいろいろ考えて不安だった。しかしモリーの姉のベティーが親切にも次のことを教えてくれたので、ジョーンズの心の傷もいえた。実は、トムがモリーを知る前に、モリーにはウィル・バーンズという男がいて、モリーが生んだ赤ん坊はジョーンズがその父ということになっていたが、バーンズが父であるということ、さらにジョーンズ自身の告白によってこれをたしかめたこと、そして、ウィル・バーンズがモリーの愛を一人じめして、ジョーンズもスクエアも同じ犠牲者であったこと、などがわかった(IV-1) (5-6)。

(v) ジョーンズはモリーの秘密がわかって、全く安心したが、ソフィアについては心穏やかな状態どころか、最も激しく乱れていて、彼の心はすっかりあけ渡されて、ソフィアが彼の心を完全に奪ってしまった。だから彼は彼女を果てしない感情で愛し始めた(IV-1) (5-6)。

(w) オールワージー氏が死のベッドでジョーンズの手をとって言う。

「おまえの気質の中には善良さ、寛大さ、節操があるが、これに用心深さと宗教を加えれば、おまえはしあわせになる。というのは前の三つの性質はおまえをしあわせに価するものにするが、本当にしあわせにするのはあとの二つであるから」と(IV-1) (5-7)。

(x) ジョーンズはまた生来激しい動物的元気を持っていた(IV-1) (5-9)。

(a) ソフィアとウエスタン夫人が話をしている場面でソフィアが言う。

「いや、私は白状します。あんなに完璧なものをもっている人を私は知りません。とても勇敢で、しかも優しく、とても機知があって、しかも嫌味がなく、とても人間味があり、とても丁寧で、とても上品で、とてもハンサムで。こんないろいろな点を比べると、あの人のいやしい生れがどんな意味があるのでしょうか」と。これに対しておばが言う。「いやしい生れ？ どういう意味？ ブリフィル氏がいやしい生まれだって？」と。ソフィアは名前を聞いてとっさに青くなり、かすかにくりかえす。要するに、ソフィアはジョーンズ氏のことを、おばはブリフィル氏のことを考えながらしゃべったのである。ソフィアが言う。

「ジョーンズ氏のことを私は考えていたの。あの人以外は知りません」と。これに対しておばは「あなたが愛しているのはジョーンズ氏であって、ブリフィル氏ではないの？」と言う。「じょうだんはやめてください。もしおばさまがまじめだとすれば、私はこの世で一

「番みじめな女です」と(IV-2) (6-5)。

(b) 召使いのオナーとソフィアが話している場面でオナーが言う。

「あの人は世界で一番もっともハンサムで、一番もっとも魅力的で、一番もっともすばらしく、一番もっとも背が高く、一番もっとも礼儀正しい人だと誰もが認めなければなりません」と(IV-2) (6-6)。

(e) ソフィアとオナーがジョーンズのことを話している場面でソフィアは言う。

「あの人は全く英雄的美徳を備えた人で天子のように善良な人です」と(IV-2) (6-13)。

(f) トムがある宿屋である客と話をしている時彼は言う。

「私はとても暴れん坊の青年でしたが、それでも一番真面目な瞬間には、心の底では本当にクリスチャンです」と(IV-2) (7-13)。

(h) ジョーンズ氏について作者は述べる。

ジョーンズ氏の個人的才能についてはこれまであまり言われなかったが、彼は実際に世界で一番ハンサムな男の一人であった。彼の顔は健康の典型であるほかに、優しさと善良な性質の最も明白な特徴を持っていた。これらの特質は彼の容貌に非常に特徴的だったので、彼の眼の中の精気と感受性は正確な観察者によって感知されたかもしれないが、それほど識別力のない人の眼にはとまらなかったかもしれないし、この善良な性質が彼の顔に非常に強く描かれていたので、彼を見る人はほとんど全部それを話題にした。

彼の顔にはほとんど表現できない優美さがあるのは非常にすばらしい血色のせいであると同様に善良な性質のせいであったし、彼の顔は、もし男性的な体と物腰がなかったら、あまりに女性的な様相を与えたかもしれない。そして後者はアドーニスの性質を持っていたように、前者はヘラクレスの性質を持っていた。更に彼は活動的で上品で陽気で愛嬌がよかつたし、彼のいるところではどんな会話にもいきいきさせる動物的元気の流れがあつた(IV-2) (9-5)。

(j) 自然と人間との関係並びにジョーンズについての作者の考え。

自然はあらゆる人間の構成の中で好奇心か虚栄心を同じように決してまぜあわせてはいないが、服従させたりおさえつけたりするために、沢山の技術や努力も要求するような両方の割合、即ち、英知または育ちのよさをもつ登場人物にどんな程度にも価値するあらゆる人にとって絶対に必要不可欠なものを、自然が割当てなかった個人は恐らく一人もいないだろう。そういうわけでジョーンズは育ちのよい男とまさしく呼ばれるかもしれない(IV-2) (9-7)。

(a) ソフィアとオナー夫人が話している場面で、ソフィアはジョーンズが他の女と一緒にいると聞いて震え真っ青になる。これに対してオナー夫人はソフィアを慰めて、あんな価値のない奴のことをこれ以上考えないように願う。「彼は裏切り者で哀れな奴です」とオナー夫人。「彼は悪漢であるだけでなく、程度の低い軽蔑すべき哀れな奴です」とソフィア

ア(Ⅳ-3) (10-5)。

- (b) ソフィアが寝ていたベッドに彼女のマフがあるのをパートリッジが気づいてジョーンズが興奮する場面で作者は述べる。

この時のジョーンズの振舞い、彼の考え、彼の顔つき、彼の言葉、彼の行為はすべて乞食に似たものであった。パートリッジに苦々しい呪いの言葉を吐いて、彼に下へ降りて行って馬を借りるように命令した(Ⅳ-3) (10-6)。

- (d) ジョーンズがロンドンのある宿屋にフィッツパトリック夫人を訪ねたあとの描写。

ジョーンズは人工的ではなく、生まれながら育ちのよさを持っていた。従って彼の宿屋の秘密を召使いに伝える代りに、夫人に特に伝えて、その後すぐ儀式ばって引き下がって行った(Ⅳ-3) (11-4)。

- (e) ジョーンズがフィッツパトリック夫人と別れて落ちこんでいた時、階下で大騒動が起る。この時、

ジョーンズはどんな時でも困っている人を助けるのに決してうしろ向きではなかったので、すぐ階下に走って行って、食堂にはいってみたら、知恵と美德の若い紳士が召使いによって壁に押しつけられていた。だから飛んで行って敵の手から助けてやった(Ⅳ-3) (11-5)。

- (h) ジョーンズがフィッツパトリック夫人、ミラー夫人、ナンシー嬢と話をしている場面で作者は述べる。

彼の気質は生まれながらに希望にみちていたので、この機会を楽しみ、彼の想像力はその晩彼の愛しいソフィアに会うことを期待して沢山の自惚れを作り上げた。

読者よ、もし汝が私に対して何かよい希望を持っているなら、汝がこの希望にみちた心を持つことを私は望む。というのは沢山の偉大なペンを使って来た幸福の主題を沢山読み長い間考えた後、この(ジョーンズが持っている)気質の中に幸福を取り入れたい気がしているのである(Ⅳ-3) (11-6)。

- (i) ソフィアとベラストン夫人が話している場面でソフィアが言う。

「私は彼(ジョーンズ)のしたことを疑うことはできません。更に、もしあなたが彼を観察するなら、彼の言葉遣いには上品さ、優雅さ、表現の美しさがあります」と(Ⅳ-3) (11-7)。

- (a) ベラストン夫人とフェラマー卿が話している場面で夫人は言う。

「私の回りにはしあわせな男性が沢山いるけど、彼は世界で一番身分の低い男で乞食で私生児で捨て子で、あなたの召使いより身分の卑しい奴です」と(Ⅳ-4) (15-2)。

- (b) オナー夫人とジョーンズがいる場面で夫人は言う。

「あなたとソフィアが結婚できれば、こんなにめでたいことはない。というのはあなたは寛大で気立てのよい紳士だから。あなたが彼女を愛し、彼女があなたを心から愛している

のは確かなこと。それを否定するのは空しい」と(Ⅳ-4) (15-7)。

(c) ベラストン夫人がウェスタン夫人に向かって言う。

「ジョーンズは非常に愉快的な男で、私たちにとって大きな推薦書であると男たちが言う美德をひとつ持っている」と(Ⅳ-4) (16-8)。

(e) オールワージー氏とミラー夫人とブリフィルがいる場面でブリフィルが

「あなたの養子ですね、あのジョーンズはあなたが胸の中で育てて来たあのあわれな奴は、地上で最大の悪党ということになりますよ」と言ったのに対して、ミラー夫人が叫ぶ。「聖なるものすべてにかけて、それはまちがいです。ジョーンズは全然悪党ではありません。彼は息をしている最も価値ある人間です。もし誰かが彼を悪党と呼んだら、にえたぎったお湯を彼の顔にかけますよ」と(Ⅳ-4) (17-2)。

(f) 上記と同じ場面でミラー夫人は言う。

「私は彼にとって一番大きな一番優しい義理があります。彼は私と家族を助けてくれたんです。彼はあなたにひどい扱いを受けて来たし、そのことを私は知っています。あなたは全くの善であり名誉であるということを私は知っていますが、あなたがこの可哀相でどうしようもない子供についてあんなに親切で優しいことをいろいろ言われたのに、彼を軽蔑してあいつと呼んでほしくなかった。実際に私の一番善良な友人である彼があなたからもっと親切な名前と呼んでほしい。もしあなたが彼の善良で感謝にみちた言葉を聞いたならば。彼はあなたの名前を呼ぶ時は賞讃の言葉でよびます。ちょうどこの部屋で彼が膝をついてあなたの頭上に天の祝福があるように祈っているのを見たことがあります。私はあの子があなたを愛する以上にあの子を愛することはできません」と(Ⅳ-4) (17-2)。

(g) 上記と同じ場面でミラー夫人は言う。

「あの青年には欠点がないと言うつもりはありませんが、それは気性の激しさ、若者らしさの欠点であり、彼だったら改めるべき欠点だし、万一できなくても、その欠点は人間が祝福を与えられるあの一番人情味のある、心優しい、正直な心とはくらべものになりません」と(Ⅳ-4) (17-2)。

(h) 上記と同じ場面でミラー夫人は言う。

「青年紳士を挑発するのを仕事にしている悪漢がこの街にも沢山いることを天は知っています。最大の挑発以外は何も彼を誘惑しなかったはずで。というのは私の家で出会った紳士の中であんなに紳士らしくあんなに気立ての優しい人を見たことがありませんし、彼は家の中の人にも外の人にもみんなに愛されていましたから」と(Ⅳ-4) (17-2)。

(i) ミラー夫人とソフィアがいる場面で夫人は言う。

「彼は今まで生まれた人のうちで一番気立てのよい人です。…こんなに親切で、こんなに善良で、こんなに寛大な青年に対して十分なことが私にできるかどうかあなたが判断して下さい。確かに彼はすべての人間のうちで一番善良で一番価値のある人間です」と(Ⅳ-4)

(17-6)。

(j) パートリッジとジョーンズが話している場面で作者がジョーンズに言わせる。

「なぜ私は運命の女神を責めるのか。私自身がすべての悲惨の原因である。私に振りかかったすべての恐ろしい悪は私自身の愚かさと悪徳の結果である。パートリッジよ、あなたが話したことは私から五感を奪ってしまうところだった」と(Ⅳ-4) (18-2)。

(l) スクエア氏が友人(オールワージー氏)あての手紙の中で述べる。

「この若者は心の最も気高い寛大さ、友情のための最も完璧な能力、最高の正直、人間を高貴にできるあらゆる美德を持っています。勿論、彼には欠点がいくつかありますが、その中であなたに対する義務とか感謝の欠如は数のうちにはいません。それどころか、あなたが彼を家から追い出した時、彼は自分よりもあなたに対して心から血の出る思いをしていたのです」と(Ⅳ-4) (18-4)。

(m) ウォーターズ夫人とオールワージー氏が話している場面で夫人は言う。

「実に彼は男の中で一番価値のある男です。彼の年齢の若者で彼ほど悪徳のない者はいないし、20番目の美德をもっている、彼はそれを捨てる決心をしていると私は確信しています」と(Ⅳ-4) (18-8)。

(p) 上記と同じ場面でオールワージー氏は言う。

「あなたのような長所のある夫人が大目に見て下さっても、彼は男の中で一番見すてられた男です」と(Ⅳ-4) (18-9)。

(q) ミラー夫人とジョーンズが話している場面で夫人が言う。

「ジョーンズさん、あなたはあまりに善良すぎる。この世で生きるには限りなく善良すぎる」と(Ⅳ-4) (18-11)。

(2) ソフィア

(a) ソフィアの心はあらゆる点で体と同じであった。否、体が心からいくつかの魅力を借りていた。というのは彼女がほほえむと、気性の優しさがその栄光を顔一面に発散させていたからである。ソフィアがどんな精神的たしなみを自然から得たとしても、それは人工によって幾分改善され磨かれていた。というのは彼女は叔母のもとで教育されていたからである。叔母は非常に慎重な夫人で、世の中を十分知っており、若い頃宮廷あたりで生活して、数年前にそこをやめて田舎へ帰って来た。その叔母の話やしつけによってソフィアは完璧によく育てられていた。とはいっても習慣によってのみ、そして上流社会といわれるものの中で生活することによってのみ、得られる振舞いのゆとりが少し欠けていたが。それは純真無垢で十分うめあわされており、良識も生まれながら上品さも十分に備えている(Ⅳ-1) (6-2)。

(b) ソフィアがこの物語に登場したのは18歳で、オールワージー氏とウェスタン氏はしっか

りした地位を築き、一緒に生活していたし、トムとブリフィルの幼い頃からの知り合いであり、年齢が同じぐらいで遊び友達であった。トムの気性の陽気さの方がブリフィルのクソまじめな性質よりソフィアには合っていた(IV-1)(4-3)。

- (c) ソフィアはトムがなまけもので、考えが足りなくて、元気なはずらっ子だが、彼以外に誰も敵ではないと知っていた。これに対してブリフィルは用心深くて慎重で真面目な青年だと見抜いていた。ブリフィルは人間性に対して大きな名誉を与え、社会に対して最善を生み出す性格であったが、ソフィアはその反対に、トム・ジョーンズを尊敬し、ブリフィルを軽蔑した。それはソフィアが名誉と善の意味を知ってすぐのことだった(IV-1)(4-5)。
- (d) ソフィアには最高の無邪気と慎み深さがあり、気性の快活さが目立っていた(IV-1)(4-5)。
- (e) ソフィアはハープシコードを演奏するのが得意であり、音楽を最高に愛する女で、ヘンデルの音楽以外は喜んで演奏しなかったが、父の好みに合わせていろいろな曲を弾いた(IV-1)(4-5)。
- (f) ソフィアの父の言葉は彼女にとって法律であった。スポーツ(ここでは狩猟)は全然楽しくなく、あまりに粗くて男性的なので、彼女の性質に合わなかった(IV-1)(4-8)。
- (g) ジョーンズがソフィアを助けた場面で、
ソフィアは優しさにみちあふれた顔で彼を見ないわけにはいかなかったもので、その優しさが彼女の心の中にもっと強い感情を表わしたが、その感情は第3の力強い感情(即ち愛)の助けなしに、感謝や憐憫の気持ちでも女の最も優しい胸の中に起こせないぐらいのものだった(IV-1)(4-13)。
- (h) この事故(ソフィアが馬から落ちそうになった時ジョーンズが助けたが、その時ジョーンズが左腕を折った事故)がソフィアに強く作用したし、この時魅力的なソフィアはジョーンズの心に同様の印象を与えた。実を言うと、彼はそれ以前に彼女の抵抗できないいろいろな魅力に気づいていたのだった(IV-1)(4-13)。
- (a) ブリフィルのソフィアについての考え方を作者は述べる。
ソフィアの財産とソフィアの体だけが彼の願いの対象であって、その絶対的財産をまもなく手に入れることを彼は全然疑わなかった。というのはソフィアは父親に対して完全に服従することを彼は知っていたから(IV-2)(6-7)。
- (b) ウェスタン氏がオールワージー氏と話をしている場面でウェスタン氏は言う。
「私の一人娘、私の可哀相なソフィーは私の心の喜びであり、私の年齢の希望と慰めのすべてであります」と(IV-2)(6-9)。
- (c) ソフィアが16ギニーはいっている財布や時計や指輪をオーナーに持たせてジョーンズに持って行かせる場面で作者は述べる。
彼女の父は彼女に対して気前がよかったが、彼女は金持ちになるにはあまりに気前がよかった(IV-2)(6-13)。

- (d) 宿屋のお上さんとジョーンズが話をしている場面で、お上さんがあなたが今寝ているベッドにソフィアが寝たことがあると言った時、ジョーンズが言う。

「あの人は優しさそのもの、親切そのもの、善良そのものです」と(IV-2) (8-2)。

- (e) 宿屋の一室でジョーンズと散髪屋のベンジャミンが話をしている時、ジョーンズがソフィアについて告白する。

「世間が縁組みをさせることのできないそんな女。どんな眼もあんなに美しいものを見たことがないが、あれは全くとるにたりない点です。あの物わかりのよさ、あの善良さ、ああ、私は彼女を永遠にほめることができるし、それでも彼女の長所の半分を省略しましょう」と(IV-2) (8-5)

- (a) オナー夫人と一緒にある宿屋に泊っていた時の

ソフィアの性格は百合のように白い性格であった(IV-3) (10-5)。

- (b) ソフィアが一晩すごしたアップトンの宿屋では

チャーミングなソフィアの美しさと愛らしい振舞いがサマーセットシアのエンゼルの名前で今日までうわさになっている(IV-3) (10-7)。

- (c) 女性の勇気、勇敢さ、優しさ、上品さについて作者が述べているところで、

ソフィアは女性が持つことのできる優しさすべては勿論のこと、女性が持つべき気力(spirit)をすべて持っていた(IV-3) (10-9)。

- (d) ソフィアとオナーとガイドがロンドンへ行く道の宿屋から 200 歩ぐらい行った時、

ソフィアがガイドに近づいて、プラトンの声よりも蜂蜜にみちた声でブリストルへ行く最初の曲角では曲がるように頼んだ(IV-3) (10-9)。

- (e) フィッツパトリック夫人とオナー夫人の前に現れた時の

ソフィアはこの瞬間ほど美しく見えたことはなかつたろう。従って宿屋の女中が二階からおりて来て、一体全体地上に天使がいるとすれば、今二階にいると断言したのだが、彼女の誇張表現を私達は非難すべきではない(IV-3) (11-3)。

- (f) ソフィアがフィッツパトリック夫人に自分はロンドンに行くと言った時、夫人も一緒に行くことに同意した。すぐ出かけることにしたが、外は月がこうこうと照っているし、霜までおりていた。しかし

ソフィアは若いレディが夜に旅行をする時感じる心配は全然していなかった。というのは彼女はある程度生まれつきの勇気を持っていたし、彼女の現在の感情は幾分がっかりしたところがあったのだが、生まれつきのために逆に勇気がわいていた。更に月あかりで、無事に2度も旅行をしていたので、3度目はもっと大胆になっていた(IV-3) (11-3)。

- (g) フィッツパトリック夫人がソフィアと話をしている時、夫人が言う。

「ああ、私の可愛いソフィーちゃん、あなたはセンスのある女性です。万一ある男性と結婚するなら、あなたより少い能力について、結婚前に彼の気質についてたびたび試してみ

なさい。そして彼がそのようなすぐれた点に従うのに我慢できるかどうか見てみなさい」
と(Ⅳ-3) (11-7)。

(h) 上記と同じ場面で、

ソフィアは均整のとれた美人ではなくて、気持ちのいい、きわめて上品な女性であった
(Ⅳ-3) (11-7)。

(a) フェラマー卿とベラストン夫人が話している場面で彼が言う。

「彼女は宮廷育ちではないでしょうか。彼女の美しさのほかに、あんなに上品で、あんな
に物わかりがよく、あんなに丁寧な人を私は見たことがありません」と(Ⅳ-4) (15-2)。

(b) 上記と同じ場面で彼が言う。

「彼女はイギリスで一番よい結婚をする人だと思います」と(Ⅳ-4) (15-2)。

(e) 上記と同じ場面で彼が言う。

「あなたのおっしゃるのを聞いていると、あなたの従妹を尊敬する気持ちが薄らぐどころ
か、私の心がゆれて、同情の気持ちが高くなります。あんなに値ぶみできないぐらいの宝
石(ソフィア)を保存する手段を何か見つけなければなりません」と(Ⅳ-4) (15-2)。

(f) 上記と同じ場面で彼が言う。

「私の考えでは、どんな女性も彼女の魅力の半分ももっていなかった」と(Ⅳ-4) (15-4)。

(g) オナー夫人とジョーンズが話している場面で夫人が言う。

「可哀相にソフィアもがっかりさせられるのではないかと心配です。というのは彼女はひ
よこのように心のやさしい子だから、彼女が私の勇気を少しももっていないのが残念です」
と(Ⅳ-4) (15-7)。

(i) オールワージー氏とウエスタン氏が話している場面でオールワージー氏は言う。

「彼女を知っているすべての人の一致した意見だけでなく、私自身の観察によると、彼女
は善良な夫への値ぶみできないぐらいの宝物になるだろう。彼女の個人的能力は確かに賞
讃に価するものであるから、私は何にも言わない。彼女の善良な性質や慈悲深い気質や謙
虚さはあまりに有名で讃辞を必要としないが、一番善良な女性で天使の第一人者の中に高
度に存在する一つの特色を彼女は持っている。それはきらきら光るようなものではないの
で、普通では人の眼にとまるようなものではないので、それはあまりに小さいことなので
一言いいたい。この際否定の言葉を使うと、彼女の口から生意気な言葉や当意即妙の答え
のようなものは聞いたことがない。知ったかぶりのところはないし、ましてや沢山学問を
し経験の結果である知恵のあるふりをしない。若い女の子がそのように気取ることは猿の
気取りと同じように馬鹿げている。わがまま勝手な感情はないし、気むずかしい意見は言
わないし、相手をあれこれあげつらうこともない。彼女が男の中にいるのを見た時はいつ
も、教える者の出しゃばりではなく、学ぶ者の謙虚さをもって、注意を集中していた。スワッ
カム氏とスクエア氏の論争について彼女の意見を聞きたいと思って、一度だけ彼女を試し

たことがある。それに対して彼女は大変優しく答えた。『お赦し下さい。善良なオールワージー様、あの二人の紳士の意見が合わない点を決定する能力が私にあるとはまさかお思いではないでしょう』と。スワッカムとスクェアは二人とも同じように自分自身に好ましい決定を確信して私の申し出に賛成した。彼女は上機嫌に答えた。『絶対にお赦し下さい。どちらか一方に私の判断を下すほどお二人に敢然と立ち向かう勇氣はありません』と。実際に彼女は男を理解するのに最高の敬意をいつも表していた。これは善良な妻になるのに絶対に欠くことのできない特質である。一つつけ加えておくと、彼女は明らかに気取りは全然ないので、この敬意は確かに本当にちがいない』と(IV-4) (17-3)。

(j) 上記と同じ場面でオールワージー氏は言う。

私はこの若い女性の長所を長い時間しゃべったが、一つには私は本当に彼女の性格にほれているからだ』と(IV-4) (17-3)

(l) ミラー夫人がソフィアにジョーンズの手紙を渡した場面で作者は述べる。

彼女の心が最も優しい悲しみ以外に何も心配しない時、あらゆる考えが悩ましい考えに満たされている時、楽しそうな外見を顔に無理に表すことがどんなに難しいかを彼女は理解したに違いないと(IV-4) (17-6)。

(m) ウェスタン氏とソフィアがいる場面で作者は述べる。

ウェスタン氏の本来の優しさがソフィアの忠実な、感謝する、優しい、愛情のある心に影響を与えたと(IV-4) (18-2)。

(n) ミラー夫人とジョーンズが話している場面で夫人は言う。

「本当に彼女は美しい女で、私が今まで見た一番甘美で一番思慮深い女です。彼女が優しい表情をしたので、もう少しでキスをするところだった。それはセネカの僧正にふさわしい感情だった』と(IV-4) (18-10)。

(3) オールワージー氏

(a) この王国の西部のサマーセットシアという地方に昔からオールワージー氏は住んでおり、自然も財産もお気に入りの人といってもよい紳士であった。というのはこの自然と財産が彼を一番祝福し、一番豊かにしているように思われたから。自然から好ましい人物、健全な体質、しっかりした理解力、慈悲深い心を引き出しており、財産からは郡で一番大きな領地の相続人ということになっていた。この紳士は若い頃立派な美しい女性と結婚し、ことのほか愛しており、彼女との間に3人の子供が生まれたが、3人共小さい頃なくなってしまった。同じく最愛の妻を不運にも埋葬することになったのは、この物語が始まる5年前だった。妻の死が彼にとってどんなにショックであっても、彼は分別の人、節操の人らしく耐えた。というのは自分自身をまだ結婚していると見なし、彼の妻が彼よりちょっと早く旅(やがて追いつく旅)に出たと考えていたし、二度と別れることのない場所で彼

女にまた会うことを全然疑っていなかったからである。彼の感覚は隣人の一部の人たちに非難され、彼の宗教は別の人たちに、彼の真面目さは、更に別の人たちに非難されたのだが (V-1) (1-2)。

(b) オールワージー氏は善良な心を持ち、家族は一人もいなかった。正直者のように生き、借金は1シリングもなく、彼自身のもの以外は何も取らず、立派な家を持ち、隣人を心から歓迎してもてなし、貧しい人には慈善的で、病院を建てた (IV-1) (1-3)。

(c) (1) トム・ジョーンズの (a) で述べたように、ある晩オールワージー氏は自分のベッドの中で赤ん坊を見つけるのだが、その時彼はその光景にびっくりしてしばらく立っていたが、彼の心の中の生来の善良な心が働いて、その憐れな子に対してすぐ同情を始めたのだった (IV-1) (1-3)。

(d) オールワージー氏は生きとし生ける者に一番多くの善をほどこすことによって、彼の造物主に一番受け入れてもらうにはどうしたらいいかを黙想している慈愛にみちた人間であった (IV-1) (1-4)。

(e) キャプテン・ブリフィルはオールワージー氏が生まれの卑しい子供について話している場面で、ブリフィルは言う。

「法律は生まれの卑しい子供を殺すことを積極的に認めていないが、そんな子供はつまらない人間の子供であると主張しているし、教会も同じように考えているし、よくてもせいぜい共和国で一番低い、一番恥ずべき身分に育てるべきだ」と。これに対してオールワージー氏は「両親がどんなに罪深くて、子供は確かに純真無垢である」と答えた (IV-1) (2-2)。

(i) オールワージー氏は物事を不利な点で見るのにせっかちではなかったし、世間の声には無頓着であった (IV-1) (3-7)。

(k) フィールディングが読者に向かって言う。

「諸君の意図、否、諸君の行為が本質的に善であっても、それだけでは十分でない。その意図や行為が善に見えるように注意しなければならない。もし内側が決して美しくないなら、外側も美しくしなければならない。これは絶えず注意しなければならない。そうでないと悪意と妬みが内側を黒くするように注意するだろう。その結果オールワージー氏のような人の聡明さや善良さは内側を見抜くことができないし、内側にある美しいものを識別することができないだろう」と (IV-1) (3-7)。

(l) オールワージー氏がトムの病気見舞いに来ている場面で言う。

「過ぎてしまったことは全て赦して忘れるべきである。この事故を善用すれば、結局トムのための天罰ということになる」と (IV-1) (5-2)。

(a) ウェスタン氏が娘のソフィアとブリフィル青年との結婚の申し込みをする場面で、オールワージー氏は世俗的利益のある予期しない突然の知らせを聞いて心が揺れ動くような人

ではなかった。彼の心は男にふさわしい、クリスチャンにふさわしい哲学で本当にきたえられていた。快樂と苦惱はすべて、喜びと悲しみすべてより絶対に優っているふりをしなかったが、同時にあらゆる偶然の衝撃によって幸運の女神のあらゆるほほえみ、あるいはあらゆるしかめつらによって、心を乱されたりいらだったりすることはなかった。従ってウェスタン氏の申し込みを眼に見えるような感情なしに、あるいは顔色の変化なしに受け入れた。結婚は彼が真面目に望むものであると言ってから、若い女性の美点について正しい讃辞を言い、その申し出が幸運という点で有利であると認め、ウェスタン氏がオールワージー氏の甥について述べた良い意見に対して感謝してから、もしその若い二人がお互いに好きあっているなら、この話がうまくまとまることを願っていると最後に言った(Ⅳ-2) (6-3)。

オールワージー氏が言った最後の言葉（その若い二人が好きあっているなら）は『トム・ジョーンズ』という小説の伏線のひとつになる。

(b) ブリフィルがウェスタン氏にソフィアとの結婚話をもちかけられたのに対して快い返事をしなかった場面で作者は述べる。

オールワージー氏は生来気迫の人であったし、彼の現在の落ちつきは彼の性質の中に本来あるものからではなくて、真の英知と哲学から生じたものであった。というのは彼は青年時代に燃える情熱を持っていたし、美しい女性と恋のために結婚したのだったから。従って彼は甥の冷たい（まだ結婚のことは考えていないという）返事が大いに気に入らなかつたし、ソフィアの賞讃を始めざるを得なかつたし、若者の心が何かもっと大きな愛情によって守られていないなら、その心がそんな魅力に対して難攻不落であることに不可解の念を表わさざるを得なかつたと(Ⅳ-2) (6-4)。

(c) オールワージー氏の習慣について作者は述べる。

ある感情で誰かを処罰したり、召使いを追い出したりするようなことをは決してしないのが彼の習慣であったと(Ⅳ-2) (6-9)。

(a) 弁護士のドウリングがオールワージー氏について言う。

私は彼に会う幸運に一度も恵まれていませんが、世間の人々は皆彼の善良さをうわさしています」と(Ⅳ-3) (12-10)。

(b) 弁護士のドウリングとジョーンズが話をしている場面でジョーンズは言う。

「私はオールワージー氏の親戚ではありません。もし世間の人々が彼の美德に本当の価値をおくことができないで、彼の私に対する振舞いにおいて、彼が親戚によって（私を）ひどく扱ったと考えるとすれば、世間は人間の中で一番善良な人を不当に扱っていると私は断言します」と(Ⅳ-3) (12-10)。

(a) 作者は述べる。

オールワージー氏は（ウェスタン氏の）非難を微笑みだけで怒ったが、彼が努力したと

しても、その微笑みの中に悪意か軽蔑を入れることはできなかった。愚かさに対する彼の微笑みは実に天使が人間の不合理に対して与えるようなものに似ていたと(Ⅳ-4) (17-3)。

(c) オールワージー氏とソフィアが話している場面でソフィアは言う。

「あなたのおっしゃる一言一言がああ善良で、偉大で、ああ慈悲深い性格を表していますし、それを世間の人々はみんな認めていますよ。…オールワージーさんの唇からは真実以外に何も出て来ません」と(Ⅳ-4) (18-9)。

(d) オールワージー氏とジョーンズが話している場面でジョーンズは言う。

「私の親愛なるおじさん、この善良さ、この優しさが私は圧倒し、落胆させ、だめにします。私の上にこんなに早く流れる楽しい気持ちには耐えられません。またおじさんの前に出られるとは、おじさんの恩恵に浴すとは、私の偉大な、高貴な、私の寛大な恩人によってもう一度このように親切に受け入れられるとは」と(Ⅳ-4) (18-10)。

(f) ジョーンズに向かってオールワージー氏が言う場面で、オールワージー氏がブリフィルをこらしめようとした時、ジョーンズがオールワージー氏にブリフィルを赦すように言ったのに対して、オールワージー氏は涙ながらに言う。

「おお、私の子供よ、何という善良さに私は長い間盲目であったことか」と(Ⅳ-4) (18-11)。

(4) ブリフィル

(a) 実に彼は顕著な性質をもった若者であった。年齢を越えて真面目で、慎重で、敬虔であった。彼を知っているあらゆる人の愛を得るいろいろな特質を持っていた(Ⅳ-1) (3-2)。

(b) ブリフィルは意気地なしの悪者、気の弱い哀れな奴とよく言われていた(Ⅳ-1) (3-5)。

(c) ブリフィルはスクエアとスワッカム両者に対して自分の売り込む対応のうまさを16歳の時十分持っていた。スクエアについては彼はすべて美德であり、スワッカムについては彼はすべて宗教であった。二人がいる時、ブリフィルは深く沈黙していたので、二人はこれをブリフィルによいように、自分たちにもよいように解釈していた(Ⅳ-1) (3-5)。

(d) ブリフィルがソフィアの小鳥を空に逃がした場面で、

私がソフィア嬢の小鳥を手に持っていた時、可哀相にこの小鳥は自由を望んでいると思ったからだし、何かを閉じこめることに何か非常に残酷なものがあるといつも思っていたから。それは自然の法則に反するようだし、その法則によってあらゆるものが自由の権利を持っているし、いや、閉じこめることは非キリスト教徒的でさえある。なぜならそれはしてもらいたいことをすることではないから。とは言っても、その小鳥の最後の結果、即ち恐ろしい鷹に連れ去られたことを考えると逃がすべきではなかったのだが(Ⅳ-1) (4-3)。

(e) ブリフィルがトムスの病気見舞いの場面で、

この価値ある青年は彼に対する尊敬の念を告白し、彼の不運に対しても同様の懸念を表

わしたが、彼がしばしばそれとなく言ったように、彼自身の性格の真面目さを汚さないように、親しくなることを注意深く避けていた。そのために彼は悪の交わりに対してソロモンが言う諺を絶えず口にしていた。それは彼がスワッカムほど無情というのではなかったからだし、彼はいつもトムの快復を希望していたからである。このことはこんな時に伯父によって示される比類のない善良さが絶対に見捨てられない者の中に影響を与えているに違いないからである。次のように言って話をおえた。ジョーンズ氏がこれから先何かのいたずらをするようなことがあったら、彼の味方になってしゃべるようなことは一言も言わないだろう、と(IV-1) (5-2)。

- (a) ブリフィルの性質について作者は述べる。

ソフィアのいろいろな魅力はブリフィルに全然印象を与えなかったし、彼の心が前以って何かに奪われていたのでもなかったし、そうかと言って美の感覚が全くなかったのでもなく、女性に対して嫌悪感を持っていたのでもなかったが、彼の欲望は生まれつき中ぐらいで、哲学によっても研究によっても何かほかの方法によっても欲望を容易におさえることができたし、私達がこの第1章で取扱ったあの情熱についても彼の体全体の中にその情熱を微塵も持っていなかったのであると(IV-2) (6-4)。

- (b) ソフィアと侍女のオナーが話している場面でソフィアがブリフィルについて言う。

「私の父は私が軽蔑し憎んでいる男と私を結婚させようとしているんです。…彼の名前は私の舌には毒なの」と(IV-2) (6-6)。

- (c) ウェスタン氏がソフィアに会ってソフィアとブリフィルの結婚のことでソフィアを元気づける場面でブリフィルについて言う。

「ブリフィルは元気な青年だ」と(IV-2) (6-7)。

- (a) 弁護士のドウリングとジョーンズが飲みながらしゃべっていた時、ドウリングがブリフィルをほめたのに対してジョーンズが言う。

「そんなに短いつき合いでブリフィルがあなたをだますのは不思議ではありません。というのは彼は悪魔自身のずるさを持っているので、あなたは彼を見ぬかないで、何年も彼と生活をしているのかもしれませんが。私は子供の頃から彼と一緒に育てられて、ほとんどばらばらになったことはありませんでしたが、彼の中にある悪党を半分発見したのはごく最近です。私は彼を決して好きになれなかったと白状します。人間性の中で偉大で高貴であるすべての確かな基礎である精神のあの寛大さを彼は望んでいるのだと思っていました。私は昔彼の中に利己的なものを見ましたし、それを軽蔑していましたが、彼には最も卑劣で腹黒い計略ができるのだとわかったのはごくごく最近です。というのは彼は私の率直な気質につけこんで、一連の悪い戦略によって私を破滅させるために最も深い問題に手をつけて、ついに目的を果したということを私はついに見やぶったのです」と(IV-3) (12-10)。

- (a) ジョーンズが彼の部屋にはいった時の様子。

彼はベッドに身を投げ出して、絶望のどん底に落ち、涙に泣きぬれていた。それは悔恨から流れるような涙ではないし、誘惑されたり驚いたりした心から悪を洗い流すような涙ではないし、善良な人に対して人間のもろさからたまたま起こるような自然の性質に逆らうのではなくて、この涙はおびえた泥棒が荷車の中で流すような涙であったし、最も野蛮な性質が自分のためにいつも感じるあの心配の結果である涙であった(Ⅳ-4) (18-11)。

(5) ウェスタン氏

(a) 彼がもし街に住んでいたら、音楽の玄人と思われたかもしれないほど大の音楽愛好家であって、ヘンデルの最高作品にも異議を唱えたりしたが、娘のソフィアにはよくハープシコードを弾かせた(Ⅳ-1) (4-5)。

(b) ウェスタン氏がトムsの病気見舞いに来ている場面で、ウェスタン氏とトムは言う。

「ソフィアが乗っていた馬は 50 ギニーでかって 6 歳だった」

「僕は 1000 ギニーでかって、あの馬は犬に食べさせましたよ」

「オヤオヤなんてことだ。あの馬がお前の腕を折ったからね。お前は忘れて赦すべきだよ。物言わぬ動物に対して悪意を抱くより男らしいと私は思うけど」(Ⅳ-1) (5-2)。

(a) ウェスタン氏のソフィアについての態度を作者は次のように述べる。

ソフィアは翌日の朝、食事の時、前の晩と同じ真面目な顔つきをしていて、朝食の席からいつもより早く引き上げた。父と叔母を残して。郷土は娘の性質のこのような変化に気づかなかった。実は、彼は政治屋的なところが幾分あるし、郡のために 2 回選挙に立候補したが、あまり観察力はない男だった(Ⅳ-2) (6-2)。

(b) ウェスタン氏の家でブリフィル氏とソフィアが見合いをしている時、ウェスタン氏が外で待っている場面で作者は述べる。

ウェスタン氏は恋人ブリフィル氏が娘のところから出て来るのを注意深く待った。彼はブリフィル氏の見合いがうまくいったために非常に上気しており、娘は非常に魅了されており、彼女が彼を受入れたことにブリフィル氏が非常に満足しているのにウェスタン氏は気づいて、大広間をはね回り踊り始め、沢山のおどけた仕草で彼の喜びの異常さを表わし始めた。というのは彼は自分の激しい感情を全然抑えることができなかつたし、彼の心の中でどんな時でも優勢であるものが彼を最も狂気じみた極端にかりたてたからである(Ⅳ-2) (6-7)。

(a) 兄妹(ウェスタン氏とウェスタン夫人)についての作者の描写。

兄と妹が大抵の実例において反対である以上にどんな二つのものもお互いに反対になることはできなかった。特に次の点では違っていた。即ち、兄は遠くにあるどんなものも決して予見しなかつたが、あらゆることが起った瞬間すぐ見るのに最も賢明であつた。これに対して妹は遠くを永遠に予見はするが、眼の前のものにはそれほど目ざとくなかつた。

これらの両方について読者は観察したかもしれない。即ち、実際に二人のいろいろな才能は極端であった。というのは妹は決して起こらないことをしばしば予見したのに対して、兄は実際に真実である以上のものを沢山しばしば見たからである(IV-3) (10-8)。

- (a) オナー夫人とジョーンズが話している場面で夫人は言う。

「郷士ウェスタン氏は激しい感情のままにソフィアにいたずらをするのではないかとすぐ心配です。というのは郷士は驚くほど激情的な紳士だから」と(IV-4) (15-7)。

- (b) ウェスタン夫人がウェスタン氏の宿屋についた場面で作者は述べる。

郷士は彼女の名前を聞くとすぐ、彼女を二階に招くためかけおりに行った。というのは彼はそのような儀式、特に妹に対しては偉大な遵奉者であったし、妹に対してはどんな人間よりも畏敬の念をもって立っていたからと(IV-4) (16-4)。

- (c) ウェスタン氏と夫人が話している場面で夫人は言う。

「あなたは自分の気質の中にせっかちなところが少し多すぎるぐらいあると認めなければなりません」と(IV-4) (16-4)。

- (d) オールワージー氏とソフィアが話している場面でソフィアに言う。

「父からは残酷な扱いを受けましたが、父はすべての親のうちで一番優しく一番思いやりのある父親です」と(IV-4) (18-9)。

3. 主要な語とそのコンテキスト

- (1) 善良な、よい (good)

- (a) オールワージー氏について作者は述べる。

結局、その善良な人(オールワージー氏)は彼の甥がソフィアに対して何か反対を持っているところか、真面目で徳の高い心の中では友情と愛の確かな基礎である彼女へのあの尊敬を持っているということに満足していた(IV-2) (6-4)。

- (b) ソフィアとウェスタン夫人について作者は述べる。

ソフィアが自分の部屋にいて本を読んでいた、その時彼女の叔母(ウェスタン夫人)がはいって来た。夫人を見た瞬間、力強く本を閉じたので、その善良な夫人は彼女にきかないわけにはいかなかった。「私に見せたくない本なんて一体どんな本?」「いやいや、おばさま、私が読んだと白状するのに恥かしく思ったりびくびくするような本ではありません。最近流行の若い女流作家の作品で、彼女の真実の (good) 理解力が同じ女性に名誉を与え、彼女の善良な心が人間性に名誉を与えているのです。」ウェスタン夫人は本を取り上げて、すぐ投げ捨てて言う。「なるほどこの作家は良家の出ですが、みんなが知っているような人ではありません。私は今までに読んだことはありません。というのはそれにはあまり内容がないと一流の (best) 評論家が言っているからです。」「おばさま、あえて反対はしませ

ん。一流の (best) 評論家に対しても。でもその作品の中には人間性があふれているように見えますし、いろんなところで本当の優しさ、肌ざわりのよさがあるので、私は何度も涙をこぼしました」(IV-2) (6-5)。

(c) ブリフィルがソフィアと別れたあとすぐ、ウェスタン氏が娘の様子を伺いに来た時も善良な郷土であったし(IV-2) (6-8)。

(d) ソフィアのジョーンズに対する愛を秘密にしておくウェスタン夫人は約束したのだが、その条件を絶対に破ったと解釈したのは姪(ソフィア)の異常なほどの振舞いがあったからである。その時の夫人も善良な夫人であったし(IV-2) (6-9)。

(e) ウェスタン氏がソフィアの助けを求めて、ウェスタン夫人や家中のものみんなを呼んでソフィアを助けさせ快復させたが、その騒動のあと、夫人が部屋を出て行く時、兄に対する優しい忠告を残して行ったが、その時の夫人も善良な夫人であった(IV-2) (6-9)。

(f) 上記と同じ場面で、

その郷土(ウェスタン氏)はこの思いやりのある (good) 忠告を理解しなかった(IV-2) (6-9)。

(g) 夕食後オールワージー氏がジョーンズに説教をしている場面で、オールワージー氏は言う。

「お前の行為には叱るところはないが、お前に対して今まで優しく尊敬して振舞って来たあの善良な青年(ブリフィル)をお前がひどく扱ったことだけは悪い」と(IV-2) (6-9)。

(h) ウェスタン氏の亡くなった妻の描写。

自分の意志に反して優しい父によって結婚させられたのだが、夫人はよい妻というよりむしろよい召使いであった(IV-2) (7-4)。

この逆の考え方が、『トム・ジョーンズ』という小説の伏線の一つである。

(i) ソフィアとオナーが家を出ること、特にソフィアが父の意志(ブリフィルとソフィアとの結婚)に従うことに同意した場面で作者は述べる。

この同意が善良な郷土(ウェスタン氏)を大いに喜ばせたので、彼はしかめっつらをほほえみに変え、脅しを約束に変えた。即ち彼はすべての魂が彼女の魂に包まれている、彼女の同意が彼を一番しあわせな人間にしたと彼は断言した。それから彼は大きな銀行券を彼女の小物入れに押し込んで、一番優しい方法で彼女に頬ずりをし愛撫した。その間彼の愛情の優しい対象に対してほんの少し前まで炎と怒りを放っていた彼の眼から涙がこぼれ落ちた(IV-2) (7-9)。

(a) フィールドイックが作家と批評家の違いを述べる章で、批評家に次のように呼びかける。

「私の善良な爬虫類よ、私たちが汝にしたいもうひとつの警告はここで紹介されるある登場人物にあまりにも近い類似性を汝は発見していないということである」と(IV-3) (10-1)。

(b) 上記と同じ章で作者は言う。

「これらの特徴（あらゆる職業をもつ大抵の個人が一致する特徴）を維持できると同時にその働きに変化を与えることがよい作家のひとつの才能である」と(IV-3) (10-1)。

(c) ある宿屋での騒動のあとおかみさんが言う。

「正直で善良な紳士以外にも誰も私の家では歓迎しません。好運 (good luck) に感謝しています」と(IV-3) (10-2)。

(d) ある宿屋での騒動のあと作者は述べる。

よい女優になれるものは恐らく一万人に一人もいないし、同じ人物を同等に演じることのできるものを二人と見ることはできないが、美德については見事に演じることができるし、美德を備えているものも備えていないものもみんな最高度の完璧にまで美德を演じることができる」と(IV-3) (10-2)。

(e) 上記と同じ宿屋の台所で

ある馬丁がおかみさんの美点 (goodness) をほめちぎると、次には行って来た馬丁も「彼女は本当によいレディーだ、たしかに」と言う(IV-3) (10-3)。

(f) 上記と同じ宿屋の一室でトミー (ジョーンズ) のことを考えていた

ソフィアの心は彼女の顔が美しいのと同じように善良で無邪気な心をしてベッドに横になっていた(IV-3) (10-5)。

(k) 上記の宿屋を旅の一行が出る場面で作者は述べる。

私達はこの善良な人々 (宿屋の主人とお上) に別れを告げて一同につきあうことにする。彼らはすばらしい旅、2日で90マイルの旅をして、2日目の夕方ロンドンに着いた。道中ここに述べるような冒険には出会わなかったと(IV-3) (11-9)。

(l) 上記と同じ章で

よい作家というものは気のきいた旅行者を実によく真似るものである。というのは旅行者は自分の滞在をよく考えて旅から受けるいろいろ美しいもの、上品なもの、好奇心を呼び起こすものに合わせるからである(IV-3) (11-9)。

(t) ジョーンズとパートリッジが立ち寄った宿屋

宿屋にいるのは皆善良な一行であると作者は述べ、「気ちがい以外に誰も夜のこんな時間に田舎をうろつくためにこんなよい宿屋を出ることは考えなかつただろう」と宿屋の主人は言い、「私は彼 (ジョーンズ) と同じように善良な男であると信じる」と同宿していた収税吏は言う(IV-3) (12-7)。

旅をしている者も皆善人、宿屋もよい宿屋でよいことづくめである。

(x) ジョーンズとパートリッジと案内人があがりこんだジプシーの祝宴の席での王の話。

「私が部下たちの善意 (good-will) にどれだけ価値をかわからないが、これだけは言える。私は彼らによいことをする以外に何も考えていない。私はそれを自慢はしない、というのは私はこの貧しい人たちのため (good) を思うだけでほかに何ができるか、彼らは終

日出かけて行って手に入れたものの中で一番よいもの (best) をいつも私にしてくれるからです」(IV-3) (12-12)。

(z) ジョーンズがロンドンに滞在した時泊まっていた家で、ジョーンズがある人から仮装舞踏会の招待券をもらったので、そこの奥さんと娘さんにプレゼントすると言うが、

その善良な夫人は受け取ろうとしないし、「自分の娘は善良な小売商と結婚することを希望している」と夫人は言うし、その場にいたナイティンゲール氏に「あなたのような寛大な考え方を持った紳士を娘が見つければ幸運 (good luck) だと言うし、「ナンシーはあまりにいい子 (善良な女の子) だから嫁には行かない」と言う。そしてこの善良な夫人は優しさそのものであったと作者は述べる(IV-3) (13-6)。

このパラグラフはすべて「善」が出てくるところである。

(bb) この章の出だしの文でジョーンズとミラー夫人について作者は述べる。

ジョーンズはこの日病人にとってはかなりよい夕食、即ちマトンの肩の半分以上を食べた。午後ミラー夫人からお茶の招待を受けた。というのはその善良な夫人はジョーンズとオールワージー氏との関係を知ったので、怒ったままで彼と別れることに耐えられなかったからである(IV-3) (14-5)。

(a) 作者の社会についての考え方

社会は、厳密に調べてみると、一組の非常に善良な人々の実在にあり、彼らの他愛もない嘘は歡樂と上機嫌 (good humour) を作り出す傾向があるとわかる(IV-4) (15-3)。

(b) ウェスタン氏がソフィアに言う。

「さあ、ソフィーよ、よい子におなりなさい。親のいいつけを守りなさい。お父さんをしあわせにきなさい」と(IV-4) (15-5)。

(c) ジョーンズとオナー夫人が話している場面で、ジョーンズは牧師のサプル氏について言う。

「彼は非常に信心深い善良な人ですが」と(IV-4) (15-7)。

(d) オナー夫人とベラストン夫人が話している場面でオナー夫人は言う。

「私は今まであなたさまのような善良な友人をもったことはありません」と(IV-4) (15-7)。

(e) ミラー夫人とジョーンズが話している場面で作者は述べる。

彼女の善良な天使であるジョーンズは彼女の心配をただちに和らげたと(IV-4) (15-10)。

(h) ウェスタン氏がソフィアに言う。

「さあ、ソフィーよ、ぜひいい子になってくれ、お父さんに面倒をかけるのをやめてくれ」と(IV-4) (16-2)。

(i) ウェスタン氏がソフィアに言う。

「ソフィーよ、お前はぜひいい子になってくれ、そしてお婆さんの命令は何でも聞いてくれ」と(IV-4) (16-4)。

- (l) オールワージー氏のソフィアへの心配について作者は述べる。
「その善良な人はソフィアの家出によって彼女が甥（ブリフィル）を大変嫌っていることがわかった時、だまされて話をすすめすぎたと真面目に心配し始めた(IV-4) (16-6)。
- (n) ウェスタン氏について作者は述べる。
フィッツパトリック夫人はその善良な夫人が他の人にしたように、ジョーンズ氏の話にも容易に耳を傾けたことを全然疑わなかったと(IV-4) (16-9)。
- (p) 彼女が持っているいろいろな特性について作者は述べる。
もしある女の美しさ、女の機知、女の上品さ、女の上機嫌が推奨に価するならば、それ以上のものを持っていても、私は何に価するのかと(IV-4) (16-9)。
- (q) ソフィアについて作者は述べる。
私たちはどこかで彼女のために善良な夫（ブリフィルかジョーンズ以外の誰か）を最後には用意することがありそうであると(IV-4) (17-1)。
- (r) オールワージー氏とウェスタン氏が話している場面でオールワージー氏は言う。
「私自身の観察ではソフィアは善良な夫にとって値ぶみできない宝物になるだろうし、彼女の個人的資格は確かに賞讃できるし、彼女の善良な性質、彼女の慈善的気質、彼女の謙虚さはあまりによく知られているので、讃辞は必要ない」と(IV-4) (17-3)。
- (s) ソフィアについてのオールワージー氏の言葉。
「実に彼女は男性を理解するのに最高の尊敬の念をいつも表したし、それは善良な妻になるのに絶対に欠くことのできない特質である」(IV-4) (17-3)。
- (v) ミラー夫人について作者は述べる。
この善良な女性は実際世界で一番価値のある女性であったと(IV-4) (17-5)。
- (x) オールワージー氏について作者は述べる。
彼はあまりに善良な男であったので、ミラー夫人を動かしたような高貴な原則の結果に実際に気分を害するようなことはなかったと(IV-4) (17-7)。
- (z) 旅の一行について作者は述べる。
この最後の巻では善良な一行を手本にするつもりであると(IV-4) (18-1)。
- (jj) オールワージー氏がソフィアに話している場面で
「実際、ウェスタンさん、私は彼（ジョーンズ）をむごたらしく扱いました。実にむごたらしく」と言ってその善良な人は眼を拭った(IV-4) (18-9)。
- (pp) ジョーンズについて作者は述べる。
ジョーンズの性質の中で悪徳への傾向のあったものはすべて善良な人（オールワージー氏）との絶え間ない会話によって矯正されたと(IV-4) (18-the last)。

(2) 心 (mind)

心については次のような語も考えられる。

心 (heart)、気分 (spirits)、胸 (bosom)、魂 (soul)、願ひ (desire)、同情 (compassion)、憐憫の情 (pity)、苦惱 (agonies)、決心 (resolution)、注意 (attention)、感情 (passions)、感情 (sensations)、考え (idea)、性質 (nature)、成分 (ingredients)。

(b) 今やジョーンズの中に起こったもろもろの感情 (sensations) は非常に甘く爽快なものだったので、危険な結果よりむしろ心 (mind) の中に快い静けさを生み出したが、事実この種の感情 (sensations) は、どんなに爽快でも、非常に騒々しい性質 (nature) を持っており、それら (sensations) の中には睡眠剤のようなものはほとんどない。更にその感情 (sensations) はある情況と共にながくされ、その情況がもっと甘い成分 (ingredients) とまぜられているので、甘苦いといった飲み物を作っていた。その甘苦さほど味覚にとって不愉快なものはないし、隠喩的意味で、心 (mind) にとって有害なものはない。

その可哀相な女の破滅は必然的に彼女を捨てることになるのと彼は予見していたし、この考え (thought) が彼の魂 (soul) を突き刺した。

彼自身の心 (heart) は彼を愛し、その愛のために純心無垢を犠牲にした人間 (女) を破滅させることを許そうとしなかった。彼自身の善良な心 (heart) は彼女の原因を弁護した、冷い打算的な擁護者としてではなくその出来事に関心のあるものとして、そしてその心 (heart) そのものが彼女と同様にすべての苦惱 (agonies) を深く共有しているに違いなかった。

この力強い擁護者が、憐れな情況の中で可哀相なモリーを彩ることによって、ジョーンズの憐憫の情 を十分引き起こした時、その擁護者はもうひとつの感情 (passion) の助けを巧妙に求めて、若さと健康と美しさの優しい色で女を表現した。そして彼女を願ひ (desire) の対象とし、少なくとも善良な心 (mind) にとって、同情 (compassion) の対象とした。このような考え (thoughts) の中で、可哀そうなジョーンズは長い眠れぬ夜を過ごし、朝になってすべての結果はモリーを堅く守り、ソフィアのことにはもはや考えないことだった。

この高潔な決心 (resolution) で彼は翌日ずっと夕方までモリーの考え (idea) を大事にし、ソフィアを彼の考え (thoughts) から追い出し続けたが、宿命的な夜につまらない事件が起って彼の激しい感情 (passion) はすべてまた揺れ動き、彼の心 (mind) をすっかり変えてしまった(IV-1) (5-3)。

(a) 真理の発見者と金の発見者の違いについて作者は述べる。

真理を探する場合にも金を探す場合にも両法に用いられる方法はほとんど同じである。即ち、きたない所を探したり、かき回して探したり、調べたりすることだが、実際、前者の例ではすべての場所で一番きたない所である悪い心 を探すことである(IV-2) (6-1)。

(b) 真理の発見者について作者は述べる。

真理の発見者は自分自身の心便所と同一視して、その中には神聖なものの一筋の光もないし、美德といったもの、善なるもの、美なるもの、愛すべきものは何もないので、すべての被造物の中にはそんなものは存在しないと、正々堂々と正直に論理的に結論づけている(IV-2) (6-1)。

(a) 登場人物に関する章で作者は述べる。

どんな新しい作品の中でも天使のように完璧な人物や極悪非道の墮落した人物を登場させることによって役立つよい目的を私は考えているのではない。というのはいずれかの性質を考えることから、人間の心はそのような原型から何かよい役立つものを引き出すことよりも悲しみと恥ずかしさに圧倒されるようであるから(IV-3) (10-1)。

(b) 上記と同じ章で

実際、もし気立てのよい心の賞讃と愛情を約束する人物の中に十分善良さがあるならば、たとえ小さな欠点が見えても、その欠点は私たちの憎しみよりむしろ同情を呼び起こすだろう(IV-3) (10-1)。

(c) 上記と同じ章で

実に、こういう種類の実例の中に見られるいろいろ不完全なものほど道徳的に役立つものはない、というのはこのような実例は一種の驚きを作り、邪悪で悪意のある人の欠点よりむしろ私たちの心に影響を与え、心に住むものであるから(IV-3) (10-1)。

(a) ベラストン夫人から手紙をもらった時のジョーンズの心について作者は述べる。

束縛の身分を経験した人なら最も軽いと認める束縛からの解放にジョーンズは満足したが、それでも心の中は完全に落ちついてはいなかったと(IV-4) (15-9)。

(d) ジョーンズがソフィアの手紙を読んだあとの心持を作者は述べる。

手紙が引き起こした感情は喜びと悲しみの混じったものであり、善良な人が死んだ友人の遺書を読む時彼の心に分けるものに幾分似ていたと(IV-4) (16-5)。

(3) 心 (heart)

(a) ブリフィルがソフィアに会ったあと、ロマンティックな恋人たちが必要とする女の心を全く絶対に所有することについて、その考えは彼の頭には全然浮かばなかった。彼女の財産と彼女の体が彼の願いの唯一の対象であった(IV-2) (6-7)。

(b) ソフィアの部屋にジョーンズが偶然はいって来たが、泣きぬれたソフィアが「出て行って私を一人にして」と言ったのに対して、ジョーンズは言う。

「私にそんな残酷な命令をしないで下さい。私の心はあなたの出血している唇より早く出血しているんです」(IV-2) (6-8)。

(a) フィールドینگが作家と批評家の違いを述べる章で批評家に次のように呼びかける。

「私の価値ある友人よ、汝に警告しなければならない。(というのは恐らく汝の心は汝の

頭よりよいかもしれないから) 登場人物が完全によい人物でないからと言って悪い人物だと非難しないように」と(IV-3) (10-1)。

(f) ジョーンズとソフィアについて作者は述べる。

彼のソフィアに対する自然の優しさが彼女のあの義理がたい、感謝する、優しい、愛情のある心に影響を与えたと(IV-4) (18-2)。

(4) 愛 (love, affection)

(a) 人は皆生涯において一度は恋愛をする運命にある。このために割当てられた特別の季節もない(IV-1) (1-2)。

原文では運命にあたる語は“doomed”になっているが、これは通例悪い意味に用いられる。『トム・ジョーンズ』という作品を通じて考えても、悪い意味で恋愛をする例はないようだが…。

(b) この季節の愛は人生の若い頃に時々現れるものより真面目でしっかりしたものである。女の子の愛は不確かで気まぐれで非常に馬鹿げているので、若い女性が何を考えているかわからない。いや、若い女性がいつもこのことを自分で知っているかどうか疑わしい(IV-1) (1-2)。

愛という感情がどんなものであるかを人間は一生かかって探しもとめるものであろう。言葉だけで抽象的にわかっていても、それでは具体的に示せと言われると、ちょっと戸惑うものではないだろうか。

(a) 愛について哲学者に認めてもらいたい作者の5つの要望。

(i) 人間のいくつかの(沢山のと私は信じている)胸の中には他人のしあわせに貢献することによって満足させられる親切で善良な性質があるということ。

(ii) この満足の中だけに、例えば、友情の中に、親としての愛情 (affection)、子としての愛情の中に、実際に一般的博愛の中に、大きくてこの上もない喜びがあるということ。

(iii) そのような性質を愛と呼ばなければ、それに代わる名前はないということ。

(iv) そのような純粋な愛から生じる快楽が愛の願いの助けによって高められて甘くされることがあっても、快楽だけは存在できるし、愛の願いの介在によって破壊されるのではないということ。

(v) 若さと美しさが願いに対する動機であるように、尊敬と感謝が愛にふさわしい動機であるし、そのような願いは、老齢や病気が愛の対象に追いつく時、当然止むかもしれないが、老齢や病気が愛に対して何の影響も持つことはできないし、愛の根底のために感謝と尊敬をもつあの気持や感情を善良な心からゆり動かしたり、除いたりすることはできないということ(IV-2) (6-1)。

(g) ジョーンズ氏がベラストン夫人と会う予定だった部屋で彼が待っていると、夫人ではな

くて、ソフィアがはいて来る。ソフィアは考えごとをしていてすぐには気づかなかったが、グラスの中の自分の美しい顔を見たあと、動かないで立っている彫像のようなジョーンズに気づく。あまりに突然だったので、大きな叫び声をあげて、気絶して倒れそうになるところをジョーンズの腕にだきかかえられる。作者は次のように述べる。

この恋人たちの顔つきや考えを絵にかくことは私の力の及ばないところである。二人の感情はお互の沈黙から判断すると、言葉に表わされないものだったので、私もその感情を表現できないし、不運なことに、私の読者のほとんどが、二人の恋人の心の中にその時起こったことを、読者の心によって感じるのに十分恋愛の経験がないということである(IV-3) (13-11)。

(5) 涙 (tears)

人間は感動的な場面に出会うと、楽しくても悲しくても、いろんな場面で泣く動物ではないか。ワッと泣くか、さめざめと泣くか、ひとしずく涙を流すかの個人差はあっても。

(a) ある晩オールワージー家の夕食の時、散歩に出かけたキャプテン・ブリフィルの帰りがあまりに遅いのを心配して、

ブリフィル夫人が悲しみ嘆きながらワッと泣き出すと、しばらくしてオールワージー氏もワッと泣き出した(IV-1) (2-9)。

(c) 夕食後オールワージー氏がジョーンズを説教している場面で、

「おまえに対して非常に優しくて名誉ある振舞いをしてきた善良な若者 (ブリフィル)」と言った言葉がジョーンズにとっては呑みこむにはあまりにも苦い一服であったので、涙がどっと彼の眼からあふれ出て、話すことも動くこともできないぐらいだった(IV-2) (6-10)。

4. 格言またはそれに類似した表現

(j) モリーとスクエアの情事がばれた場面でスクエアが言う。

適合性は物事の自然によるものであって、慣習や形式や国内法によって支配されるのではない(IV-1) (5-5)。

実際不自然でないものは何も不適ではない(IV-1) (5-5)。

自分自身の評判を殺すことは一種の自殺であり、憎むべき嫌な悪徳である(IV-1) (5-5)。

人は誰も完璧に完璧ではない(IV-1) (5-5)。

自慢するのに適していない物事は行なうのに適していないかもしれない(IV-1) (5-5)。

(i) オールワージー氏が死のベッドで言う言葉。

死からのがれる人は赦されない。人は死刑の執行を猶予されているにすぎない。短い1

- 日だけ猶予されているにすぎない(Ⅳ-1) (5-7)。
- (a) ウェスタン氏とウェスタン夫人が話している場面で夫人が言う。
「彼女(娘)を選んだ正にその人があなた(父親)が彼女(娘)のために選ぶ正にその人になる」と私は信じると(Ⅳ-2) (6-2)。
- (d) ソフィアとオナーが話している場面でオナーが言う。
「イギリスのどんな父親も娘を同意なしに結婚させるべきではない。たしかに郷土は非常に善良なので、もし娘が相手の青年を軽蔑し憎んでいると知りさえしたら、たしかに彼は二人の結婚を望まないだろう(Ⅳ-2) (6-6)。
この考えも『トム・ジョーンズ』の伏線の一つである。
- (o) ソフィアと侍女のオナーが話をしている場面で作者に述べる。
女が一旦恋人のもとへ走って行く、あるいは恋人から逃げる決心をしたら、障害物は全部つまらないものとして考えられる(Ⅳ-2) (7-7)。
- (p) ジョーンズがブリストルへ行く途中出会ったクエイカー教徒が宿屋で話す言葉。
「私たちは皆死ぬものである」(Ⅳ-2) (7-10)。
- (q) 上記と同じ場面で、
「私たち皆が生まれたのは苦しむためである」(Ⅳ-2) (7-10)。
- (t) ジョーンズが泊まっている宿屋で怪我人を治療した外科医は言う。
「私たちはみんな死ぬものであり、外科医の中で一番偉い医者でも予見できない兆候が治療にはよく起こるものです」と(Ⅳ-2) (7-13)。
- (cc) 丘の上の一軒家の主人とジョーンズが話している場面で主人は言う。
「人間の異なった風俗を知るために旅行する人はベニスのカーニバルに行くことによってあまり苦勞をしなくてすむかもしれない。というのはあそこではヨーロッパのいろいろな宮廷で発見できるすべてのものをすぐ見るから。同じ偽善、同じ欺瞞、要するに違った習慣を身につけた同じ愚かさと同徳、スペインではこれらは莊重さをもって飾られ、イタリアでは壮麗さで、フランスではならず者はにやけ男のように着飾り、北の諸国では無精者のように。しかし人間性は到るところで同じであり、到るところで嫌悪と軽蔑の対象である」と(Ⅳ-2) (8-15)。
- (dd) 上記と同じ場面で主人は言う。
「最高の存在(神)の最後にして最大の作品であり、この地球の王である人間だけが太陽のもとにいる。人間だけが自分自身の本性をいやしく辱かして来た。不正直、残酷、忘恩、裏切りによって、慈悲深い存在がこのように愚かな、このように邪悪な動物をいかに形づくるかを説明するように私たちに迷わすことによって、人間の創造主の善を疑って来た」と(Ⅳ-2) (8-15)。
- (ee) 上記と同じ場面でジョーンズが言う。

「実際あなたは誤りを犯しています。その誤りは私の少ない経験から、ごくありふれた誤りであり、一人の中で一番悪い、一番下品なものから人間の性格を取り出しているのです。一方すぐれた作家が書いているように、人間の一番善良で一番完璧な個人の中に発見されるもの以外に、人間の特徴として見なされるものは何もない」と(Ⅳ-2) (8-15)。

(ff) 上記と同じ場面でジョーンズが言う。

「悪を犯す多くの人が心の中で全く悪く墮落しているわけではない。実際に誰も人間性は必ず普遍的に悪であると主張する権利を持っているようには思われたい」と(Ⅳ-2) (8-15)。

(a) ある宿屋の台所にいる若いレディーの魅力について作者は述べる。

実に完璧な美しさの中には誰もほとんど耐えられない力がある。というのは宿屋のお上は夕食を断られたのにはいい気はしなかったが、こんなに美しい女性を見たことがないと断言したから(Ⅳ-3) (10-3)。

(d) 上記と同じ場面でパートリッジが言う。

「人は誰でも一度は死ななければならない」と(Ⅳ-3) (10-6)。

(e) ウェスタン家の応接間でウェスタン氏とウェスタン夫人がソフィアのしつけについて話しをしている場面で夫人は言う。

「イギリスの女はチェルケス地方の奴隷のように取り扱ってはいけない。私たちは世間の保護を受けているし、優しい手段によってのみものになるのであって、いじめられたり、いやな思いをさせられたり、たたかれて同意することはない」と(Ⅳ-3) (10-8)。

(h) 中傷は刀より残酷な武器である。中傷が与える傷はいつも治療できない(Ⅳ-3) (11-1)。

(i) 実際に、悪意をもってあるいは理由もなくある本を非難することは少なくとも非常にたちの悪い仕事であり、不機嫌ながみがみ言う批評家は悪人ではないか(Ⅳ-3) (11-1)。

(k) ソフィアが泊った宿屋の主人は知意のある男だったので、彼に関連して作者は述べる。

人は自分にわからないことを奇妙に崇拜する傾向がある(Ⅳ-3) (11-2)。

(l) フィッツパトリック夫人はソフィアに向かって思い出を次のように話し始める。

「不幸な人が自分にとって一番楽しかった人生のある時期を思い出す時、秘かに懸念を感じるのが自然である。過去の楽しい思い出は、別れた友に対して抱くように、ある種の優しい悲しみで私たちに感動を与えるし、両方の考えが私たちの想像の中でよく現われるものである」(Ⅳ-3) (11-4)。

(o) 上記と同じ場面で、

「どんな生活状態にあっても、自分を支え慰めてくれる快活で気立てのよい仲間を持つ女性はいずれある」(Ⅳ-3) (11-5)。

(x) ついにもう一度わが主人公に私たちは帰って来たという書き出しで始まる章の中の一文。

たとえ私たちが美德をすべてもっているわけではなくても、用心深い性格の悪徳をすべてもっているわけでもない(Ⅳ-3) (12-3)。

(bb) ジョーンズとパートリッジが歩いて次の十字路に来た時、ぼろを着た足の悪い男が物乞いをしたのに対して、パートリッジは激しくののしる。これに対してジョーンズがパートリッジにたずねる。

「口には沢山の慈善を持ち心には全然慈善を持たないことを恥かしく思わないか」と(Ⅳ-3) (12-3)。

(ff) ジョーンズとパートリッジがコヴェントリーへ行く途中で鍛冶屋に立ち寄って二人が話しをしている場面でジョーンズが言う。

「人の物を見つけて、その持ち主を知っていながら、わざといつまでも持っている人は盗んだ場合も同じように絞首刑に値する」と。

これに対してパートリッジが言う。

「どうやら私たちは皆生きて学ぶべきです。…子供はばあさんに卵の食べ方を教えるかもしれない」と(Ⅳ-3) (12-13)。

(jj) 当時の批評家が考えていた教義。

すべての種類の学問は作家にとって全く役に立たないし、想像力の自然の快活と活動への一種の足枷以外の何物でもない(Ⅳ-3) (14-1)。

(kk) 本と知識の関係について、更に絵画や知識などについて作者は述べる。

本は知識の不完全な考えを与えるし、舞台はよりよい考えを与えない。即ち読書で作られた立派な紳士はほとんどいつも学者ぶる者になり、知識で作られた紳士はしゃれ男になると(Ⅳ-3) (14-1)。

(mm) ミラー夫人の娘ナンシーへのナイティンゲール氏のおわびの手紙の中で彼は書く。

「破滅以外に何もこの手紙を書かせることができなかつた男を赦して忘れて下さい」と(Ⅳ-3) (14-6)。

(b) 愛について作者は述べる。

愛は、火のように、一度十分火がつくと、すぐ炎となって燃え上がると(Ⅳ-4) (15-2)。

(c) ベラストン夫人とフェラマー卿が話している場面で、フェラマー卿がソフィアのことをとても値ぶみできないくらいの宝石と言ったのに対して夫人は言う。

「この値ぶみできないくらいの宝石というのは女が身につける宝石のように聞く耳がないのです。時間ですよ、時間こそが女の愚かさを治す唯一の薬です」と(Ⅳ-4) (15-2)。

(d) 上記と同じ場面で夫人が言う。

「ヘレンの物語が現代的であるならば、私は不自然だと思います。パリの振舞いを言っているのであって、好みを言っているではありません。というのは女はみんな元気のある男性を愛するから」と(Ⅳ-4) (15-4)。

(g) オナー夫人とジョーンズがいる場面で、ジョーンズは「ソフィアがブリフィルと結婚させられたのを見るのはささいな事」と言ってから、次のように言う。

「命ある間希望はいくつもある。この自由の国の女性が野蛮な暴力で結婚させられることはない」と(IV-4) (15-7)。

(h) 上記と同じ場面で夫人は言う。

「お互いに愛している二人がしあわせでないなら、なぜ誰がしあわせになるのでしょうか。しあわせな人は持っているものによるとは限らない」と(IV-4) (15-7)。

(x) オールワージー氏とウェスタン氏とブリフィルがいる場面でオールワージー氏が言う。

「女性の同意とか賛成なしに女性を無理に結婚させることは不正と圧力の行為であるので、わが国の法律がそれを抑制できればよいと思う」と(IV-4) (17-3)。

(z) 上記と同じ場面でウェスタン氏は言う。

「なるほど、自分自身の子供を知っているのは賢い父親であると言うが、私は娘に対して最上の称号を持っていると信じる、というのは私が娘を育てたから」と(IV-4) (17-3)。

5. 最上級表現とそのコンテクスト

(h) ジェニーがパートリッジ家から追い出された時のラテン語の英語訳。

重荷は、よく運ぶ時、一番軽くなる(IV-1) (2-3)。

(m) 哲学者のスクェアと宗教家のスワッカムについて作者は述べる。

2人の学者のうち前者は美德に、後者は宗教に関心を持っていたので、両者ともオールワージー氏との一番密接な同盟を考えていたと(IV-1) (3-6)。

(x) 作者の喜劇についての皮肉または風刺。

喜劇は舞台の上で以前上演されたどんなものよりも確かに退屈であったし、真面目な芝居を構成している退屈の最上級によってのみ引き立たせることができた(IV-1) (5-1)。

ここでも最上級という表現を使っているが、要するに最も退屈なものということである。

(11) オールワージー氏が死の床についている場面で、彼が最も強調していると思われる言葉。

人間の楽しみの中で一番長いものでも、どんなに短いことか。一番早くしりぞく人と一番遅くまで居る人との相違はどんなに実質のないものか。これは人生を一番よい見方で見ることであり、こんなにいやいやながら友人と別れることは一番好ましい動機となり、その動機から死の恐怖を得ることができるが、私たちが期待するこの種の一番長い楽しみでも、非常につまらない期間であるので、その楽しみは賢い人にとっては実に軽蔑すべきものである。だが、こんなふうを考える人はほとんどいない。というのは、人は死神にかみつかれるまで、死のことをほとんど考えないから(IV-1) (5-7)。

(nn) オールワージー氏の病気が快復して、主治医と一杯飲んでいる場面でのジョーンズの言動。

彼は生来激しい動物的な元気を持っていたので、この元気が酒の精に助けられて、一番

奇抜な効果を生み出した。彼は医者にキスをし、最も情熱的な優しさで彼をだきしめ、オールワージー氏の次に彼を愛していると誓った(IV-1) (5-9)。

- (c) ソフィアの父がオールワージー氏の家を訪れるということをソフィアがおばから聞いた時の様子を作者は述べる。

ソフィアは顔には最大の喜びを浮かべ、態度には最高の華やかさで、どきどきするゆううつな心を隠す努力をしたと(IV-2) (6-3)。

- (e) 賢い人と英知について作者は述べる。

最も賢い人は人並み以上に世間的な祝福を一番持っているようである (likeliest)、というのは英知が規定するその中庸は役に立つ富への最も確実な道であるように、富は沢山の快樂を味わうように私たちに資格を与えることができるだけである。賢い人はあらゆる欲望やあらゆる情熱を満足させるが、愚かな人はすべてのものを犠牲にして欲望や情熱に無関心になったり、飽き飽きしたりするのである。非常に賢い人は評判が悪いぐらいに貪欲であったということに反対意見があるかもしれないが、私はその例において、否と答える(今賢い人はその時は賢くなかったのだと)。同様に、最も賢い人でも青年時代には快樂を人並はずれて好んだと言ってもよい。彼らはその時は賢くなかったのだと私は答える(IV-2) (6-3)。

- (f) 上記と同じ章で作者は続ける。

英知は、要するに、最低の生活においても普遍的に知って従われる簡単な格言を実際よりも少し遠くまで広げることを私たちに教えているにすぎないのである。これは(品物を)高すぎる値段で買わないことである。

この格言を身につけて世間というマーケットへ持って行き、それを名誉や財産や快樂やその他の商品に絶えず応用する人は誰でも賢い人であると私は敢えて肯定するし、その(賢いという)言葉の世俗的な意味においてそのように認められねばならない、というのは彼は割安な買物を最大限に利用するし、実際に少し高い値段であらゆる物を買って、すべてよい品物を家に持ち帰るからだし、一方、彼は健康や純真な心や、評判や普通の値段を全く自分自身のために維持するからである。

同様に、この中庸から、彼は自分の性格を完成させる二つの教訓を学ぶ。一つは、一番よい買物をした時でも決して有頂天にならないし、もう一つは、マーケットに品物がなかったり、品物が彼には高すぎる時でも決してがっかりしないからである(IV-2) (6-3)。

- (1) ソフィアと侍女のオーナーが話している場面でオーナーは言う。

「お嬢さまがこんなに沢山の財産を持っておられることはどんな意味があるのですか、一番最もハンサムだと思う人が気に入らないとしたら。…お嬢さまの財産はどこでお使いになるのですか。だってあの人は世界で一番最もハンサムで、一番最もチャーミングで、一番最も素敵で、一番最も背が高くで、一番最もふさわしい人だと誰もが認めるに違いない

- からです」と(IV-2) (6-6)。
- (n) ウェスタン氏とソフィアが結婚について話をしている場面でソフィアが言う。
「娘の嫌いな男とむりやり結婚させて地上で一番みじめな女にしないで」「一番優しいお父さんが私の心をめちゃくちゃにできますか」「一番痛ましい、一番残酷な、一番だらだら
長びく死によってお父さんは私は殺すつもりですか」と(IV-2) (6-7)。
- (p) ジョーンズとソフィアの結婚について作者は述べる。
ウェスタン氏の頭にはジョーンズと娘の結婚の考えは一度もはいつて来なかった。
ジョーンズに対するウェスタン氏の一番暖かい数分間においても、疑いからも、どんなほかの機会にも(IV-2) (6-8)。
- (q) オールワージー氏とブリフィルが話している場面でブリフィルは言う。
「ウェスタン氏の決心は私がどちらの側もしわあせにするだろうし、最高の悲惨から守られる親(ウェスタン氏)のしあわせだけでなく、この結婚によって台なしになるほかの二人(ソフィアとジョーンズ)のしあわせも大きくするという事を説明しています」と(IV-2) (6-9)。
- (s) オールワージー氏がジョーンズを家から追い出すことになった時、
近所の人全部この裁きと厳しさを最高の残酷だと非難した(IV-2) (6-11)。
- (t) ジョーンズが家を追い出されて、行くあてもなくさまよって、行く手を小川にさえぎられた時、
彼は一番激しい苦しみに落ちこみ、髪をかきむしり、狂気と怒りと絶望を伴うありとあらゆる動作をした(IV-2) (6-12)。
- (u) ジョーンズのソフィアへの手紙の中で彼は言う。
「おお、ソフィアよ、あなたを置いて行くことはできません。あなたに私を忘れてほしいと願うことはなおさらできませんが、最も誠実な愛がその両方を余儀なくさせます」と(IV-2) (6-12)。
- (z) ウェスタン夫人がソフィアに結婚のことで説得しているのを部屋の外で聞いていたウェスタン氏が突然部屋に飛びこんできて、夫人を非難しはじめた場面で、ソフィアは父の現在の気持ちを察して、父にうまく取り入るチャンスだったが、
彼女は最も愚かな女性でも財産として持っているあの役に立つずるさを欠いていたとは言っても、彼女は本当に感受性の強い女で、理解力は一流だったのであるが(IV-2) (7-3)。
- (cc) ウェスタン氏とソフィアが叔母について話をしている場面でソフィアは答える。
「おばさんとお父さんが考え方の点で非常に違っているというのは知っていますが、おばさんがお父さんに対して最大の愛情を表しているのを1000回も聞いたことがあるし、世界の悪い妹どころかこんなに兄を愛している人はいません」と(IV-2) (7-5)。
- (ee) ソフィアが家を出る前のウェスタン氏のソフィアに対するすべての行為について作者は

述べる。

ウェスタン氏の行為は一般の親の取る態度と同じだから読者は驚かないだろうが、万一驚いたとしても私は説明できない。というのは彼が娘を一番優しく愛していたことは議論の余地がないし、同じ行為（追い出すこと）によって自分の子供を最も完全にみじめにした他の親たちもそうであった。その行為が親にとってほとんど普遍的であっても、それはあの奇妙で巨大な男の頭の中にこれまで浮かんだあらゆる不合理なものごとの中で一番説明できないことのように私にはいつも思われて来た(IV-2) (7-9)。

(jj) 作者が物語 (history) を書く際の心構えについて述べる。

人間は（もし実際にあまり異常な場合でないならば）最高の主題であり、その主題はわが物語作家あるいは詩人のペンに現れるし、彼の行為を述べる際に、私たちは描写する人物の能力を越えないように大いに注意すべきであると(IV-2) (7-10)。

(pp) 宿屋の一室でジョーンズと散髪屋のベンジャミンが話をしている場面で、ベンジャミンが持っている本の作者について作者は述べる。

その作家（トム・ブラウン）はイギリスが生み出した最大の才知の一人だと見なしていたと(IV-2) (8-5)。

(tt) パートリッジとジョーンズが真冬の真夜中、月に照らされながらウスターに向かって歩いている時、険しい丘の麓にさしかかった場面でパートリッジが言う。

「丘の頂上がゆううつな考えを作り出すのに一番適当であるならば、麓は楽しい考えを作り出すのに一番ふさわしいと思います。…この丘の頂上は世界で一番高いように思われます」と(IV-2) (8-10)。

(ccc) 丘の上の一軒家の主人（別称「丘の男」）とジョーンズが話している場面で、主人が言う。

「これらの作家（アリストテレスとプラトン）は、私にどんな学問も教えなかったし、その学問によって最も少い富や世俗的な力を得ることを自分に約束するかもしれませんが、この作家たちは両方の最高の獲得を軽蔑する術を私に教えてくれました。…富も力も知恵の知識を教えこむだけでなく、もし私たちが最大の世俗的幸福に到達しようとするなら、これ（知恵の知識）が私たちの案内役になるにちがいません。…」

「最も賢い異教徒によって教えられた哲学はすべて一つの夢にすぎないし、夢を表現する最も愚かなおどけ者と同様に虚栄に満ちあふれているという研究を私はしました。…天そのものが甘んじて私たちに現したいろいろなもの、その一番小さな知識にさえも最高の人間的機知はある助けがなければ、決して登ることはできません。私は一番すぐれた異教徒の作家たちと一緒に過ごしたすべての時間は徒労にすぎないと今考え始めました。…聖書に表された栄光にくらべるとき、彼ら（作家たち）の最高の書類はつまらないものにみえてきます。」…

「私自身にとって一番楽しいやり方でおよそ4年間を過ごし、全く思索にふけり、世事に全く悩まされない、そんな時最高の父を亡くしたのです。父の死に対する私の悲しみはすべての描写を越えるほど私が全く愛していた父を。…しかしながら、心の最高の医者である時間がついに私に安堵をもたらしたのです」と(IV-2) (8-13)。

(ggg) 上記と同じ場面でジョーンズは丘の男に言う。

「実際あなたは間違っています。私の短い経験から言うと、人間の一番悪い、一番下品な性格から人間の性格をとることによって一般的な間違いをしているのですが、一番善良で、一番完璧な人の中で発見されるもの以外に人間の特徴として尊敬されるものは何もない」と(IV-2) (8-15)。

(hhh) 上記と同じ場面でジョーンズは言う。

「私はこの世でほんの短い間生きて来ましたが、男性は最高の友情の価値があるし、女性は最高の愛の価値があります」と(IV-2) (8-15)。

(kkk) ジョーンズと丘の男が歩いていて、少し離れた下の森から流れてくる最も激しい女の叫び声を聞いたので、ジョーンズが彼女を助けた場面で（彼が助けた女性は上半身裸のような状態だったので）、

彼は彼女に自分のコート差し出したが、最も熱心な勧誘を絶対に拒絶したので、どんな理由なのか私（作者）にはわからないと述べる(IV-2) (9-2)。

(ooo) 英雄（主人公）についての作者の考え。

英雄の心がどんなに高尚であっても、その体は最悪の弱点に陥りやすいし、人間性の最悪の家事室を条件としている。後者の中で食べる行為は哲学的威厳から極度に苛しく傷つけるものとして賢人には考えられて来たが、この世で一番偉い王子、一番偉い英雄、一番偉い哲学者によってもある程度演技されねばならない(IV-2) (9-5)。

(a) 作家と批評家の相違についてフィールディングは述べる。

私たちがここで使った隠喩 (allusion, metaphor) はこの場合無限に大きすぎると認めなければならないが、実に一流の作家と最低の批評家との間の相違を表すのに全く十分な作品はこれ以外にないと(IV-3) (10-1)。

(c) ある宿屋で紳士が女中にある部屋を案内させるが、ドアがしまっていたので、突き破って中にはいったところ、われらの主人公ジョーンズがいて、彼と紳士のなぐり合いが始まる。

それを見たウォーターズ夫人が最も激しく叫び始める。「サツジーン！ゴートー！」もつとひんばんに「レイプ！」と(IV-3) (10-2)。

(d) 上記と同じ宿屋の台所にお上と女中とパートリッジがいる時、二人の若い女性がはいつて来た。

パートリッジはそのうちの一人のドレスの素晴らしさに最高の畏敬の念と驚きをもって

心を打たれた。実に彼女はこれ以上に尊敬すべき素晴らしいタイトルを持っていた。というのは彼女は世界で一番美しい人間の一人だったから(IV-3) (10-3)。

- (i) ソフィアとオナーが立寄った宿屋にジョーンズがいたということをお上がソフィアに話す場面でお上は言う。

「今まで見たうちで一番美しいカップルです。実にあなたは世界で一番すてきなレディだと彼が私に言いました」と(IV-3) (10-9)。

- (k) ソフィアとオナーとガイドがセヴァンを通り過ぎた時、後から数頭の馬が追いかけて来たので、ソフィアは恐れていたが、

女の声だったのですぐ安心した。その声は最も優しく最も丁重に挨拶した。この挨拶にソフィアも同じように丁重にしかも彼女にとって最高に満足して答えた(IV-3) (11-2)。

- (q) フィッツパトリック夫人がソフィアに思い出話をする場面で夫人は言う。

「最も意図されない言葉、最も偶然の顔つき、最も少ない親しみ、最も無邪気な自由はある人々によって私の知らないものへ誤って解釈されて拡大されるものである」と(IV-3) (11-7)。

- (t) 旅行者が旅行をする時受ける自然 (Nature) と芸術 (人工) (Art) についての擬人的表現。

自然は彼女の最も豊かな装いで現われ、芸術は最も慎み深い簡潔さで装って、彼女の優しい女性 (自然) につきそう。ここで自然は彼女がこの世に惜し気もなく与えた、最も選
び抜かれた宝物を実際にあふれ出させ、ここで人間の自然 (人間性、芸術) は自然にはどうしても及ばないある物を読者にプレゼントするのである(IV-3) (11-9)。

- (dd) ジョーンズとパートリッジが出会った乞食に向ってジョーンズが言う。

「ほら、君こそ一番しあわせな男だ。君の名前を天使の次に書いておく」と(IV-3) (12-4)。

- (ii) ある宿屋でジョーンズが狂人扱いされたのに対して宿屋のお上は言う。

「顔つきが狂っているとか眼つきがどうだとかどうして言えるのですか。あれは私がこれまでに見た一番きれいな眼です。眼はもちろん顔も一番きれいなです。非常に慎み深い礼儀正しい青年です」と(IV-3) (12-7)。

- (rr) ジョーンズとパートリッジがコヴェントリーへ行く途中で鍛冶屋に立ち寄って、二人が金のことで話をしている場面ジョーンズが言う。

「ロンドンという所は金を持たないで滞在しているには正に最悪の所だと聞いているんだが…」と(IV-3) (12-13)。

- (vv) ジョーンズとパートリッジが追いはぎについて話す場面ジョーンズは言う。

「最高の罪が強盗以上にならない者、人に対する残酷や屈辱の罪を決して犯さない者、これは、わが国の名誉にかけて言わなければならないが、イギリスの強盗と外国の強盗と区

別する一つの状況である。というのは殺人は、特にほとんど区別できないぐらい強盗にありそうなことであるから」と(Ⅳ-3) (12-14)。

(xx) ジョーンズが今ロンドンでお世話になっている家の夫人は牧師の未亡人で、年齢は50歳に近く、あらゆる魅力を身につけている。娘が二人いて上のナンシーは17歳、下のベティーは10歳である。

その未亡人は世界で一番無邪気で、一番快活な女性であり、すべての願いの中で一番しあわせと呼ばれる(人を)喜ばす願いを絶えず持っており、彼女の力は非常に小さいが、心の中では一番温い友人の一人であり、非常に愛情のある妻であったし、非常に情深く優しい母である(Ⅳ-3) (13-5)。

(aaa) ジョーンズがロンドンに滞在した時泊まった家の女主人が言う。

「誰かを破滅させることは敵対行為です」と。これに対してジョーンズは「ソフィアに対してそんな意図は全然ないし、彼女を犠牲にして自分の願いを果すぐらいだったら、最も激烈な死を苦しむ方がよい」と言う(Ⅳ-3) (13-7)。

(bbb) ポープ氏が言う女性について作者は述べる。

形式と気取りから成る女性は全然性格を持たないし、少なくとも外に現れるものは何もない。私が敢えて言いたいのは最も贅沢な人生は最も退屈な人生であり、ほとんどユーモアとか娯楽を与えないということであると(Ⅳ-3) (14-1)。

(a) 第15巻第1章の序文で作者は述べる。

ジョーンズ氏が彼の仲間たちを破滅から守る努力をしながら最も高潔な役割を演じている間、悪魔あるいは何かほかの悪霊、恐らく人間の肉をまとったものが彼のソフィアの破滅の中で彼を完全に悲惨にする働きを熱心に行っていたと(Ⅳ-4) (15-1)。

(b) 上記と同じ序文で

キリスト教的でないし、真実でもない人生に対する教義は、理性だけが不滅の信仰に対して与えることができる最も上品な議論を、実際に破壊している(Ⅳ-4) (15-1)。

(i) オナー夫人とジョーンズがいる場面で夫人はソフィアについて言う。

「彼女は私にとって一番優しい女性でした」と(Ⅳ-4) (15-7)。

(q) ナンシー嬢とナイトィンゲール青年が結婚式をあげる場面でのジョーンズについて作者は述べる。

彼は自分自身に大きな幸福をもたらすことなしに悲惨の最低の状態から喜びの最高の高さまで、ある家族全部を引き上げる道具になることはできなかつたし、それは世俗的な人が最も厳しい労働を経験することによって、しばしば最も深い罪悪の中を泳ぎ渡ることによって、自分自身に買い求めることのできないものだったと(Ⅳ-4) (15-18)。

(t) オナー夫人がソフィアからの手紙を持って来るかどうか、いらいらしているジョーンズについて作者は述べる。

このいらいだが、最悪を知りたいことを願ひ、不確実を最も耐えられないものにする人間の心の生来の弱さから起ったのかどうか、そして彼がある秘密の希望をまだ秘かに持っていたかどうかを私たちは決定していない。しかしそれ（心の弱さ）が最後かもしれないということを愛したことのある人は誰でも知らざるをえない。というのはこの激しい感情によって私たちの心に働くすべての力のうち、最もすばらしいものは絶望の中で希望を支える力であるからと(IV-4) (15-10)。

(u) ベラストン夫人のソフィアに対する感情を作者に述べる。

夫人は可哀そうなソフィアを最も執念深い憎しみで憎んでいたのです、自分自身に対する相互の憎しみが私たちのヒロインの優しい胸の中に住んでいると考えていたと(IV-4) (15-10)。

(w) ソフィアの部屋でウェスタン氏が彼女にブリフィルとの結婚を次のようにお願ひする。

「ブリフィルが来たらすぐ娘と結婚すると約束してくれ。そうすればおまえは私を世界で一番しあわせな男にしてくれるし、私はおまえを一番しあわせな女にしてやる。ロンドンで一番すばらしいドレスを買ってやるし、一番すばらしい宝石も買ってやる」と(IV-4) (16-2)。

(x) 上記と同じ場面でソフィアが言う。

「父上の好みに合うようにすべての人生の中で最もみじめな人生に耐える決心をしたばかりです。…あの最も憎むべき最も忌むべき運命を受け入れることにします。…もししあわせは考え方にあることが本当なら、私が地上のあわれむべき者すべての中で最もみじめだと自分を思う時、私の状態がどんなふうになるのでしょうか。私はパパが活着ている間、パパの同意なしに彼（ジョーンズ）ともほかの誰とも決して結婚しないと最も厳粛な約束をします」と(IV-4) (16-2)。

(aa) ジョーンズがソフィアへの手紙の中で書く。

この一番優しい性質は、私のソフィアが一番高い程度に持っているのですが、彼女のジョーンズがこのゆううつな機会に苦しんだに違いないものを彼女に十分知らせることができると(IV-4) (16-3)。

(bb) 上記と同じ手紙の中で、

最も完全な賞讃、最も注意深い観察、最も熱心な愛、もつともとろけそうな優しさ、あなたの意志への最も観念した服従でも、私のしあわせに対してあなたが犠牲にできるものをつぐないをすることができるのでしょうか。…私の最初の願ひはあなたがどんな時でも女の中で最もしあわせな女であるのを見ることでしたし、見ることです(IV-4) (16-3)。

(ee) ソフィアがジョーンズへの手紙の中で書く。

私は父親の中で一番善良な父に同意できないことが一つありますが、私は父に逆らって行動しないように、また彼の同意なしに重要な手段を取らないように、固く決心していま

すと(Ⅳ-4) (16-5)。

(ii) ソフィアについてフィッツパトリック夫人がジョーンズに言う。

「確かに彼女はそのような長所を見落とすことができる女性の中で一番軽蔑すべき女性です」と(Ⅳ-4) (16-9)。

(jj) 喜劇作家と悲劇作家について作者は述べる。

喜劇作家が主要人物をできるだけしあわせにした時、あるいは悲劇作家が主要人物を人間的悲惨の最高のところまで連れて来た時、両作家とも彼らの仕事はできた、彼らの務めは終わったと結論すると(Ⅳ-4) (17-1)。

(fff) オールワージー氏とジョーンズが話している場面でジョーンズが言う。

「ソフィアを自分のものと呼ぶことは最大の喜びであり、今となっては天がさずける唯一の祝福です」と(Ⅳ-4) (18-10)。

(hhh) ジョーンズとソフィアが話している場面でジョーンズが言う。

「おお、私のソフィアよ、人間の心を燃やした激しい感情の中で最も純粋な感情の誠実さを疑ってはいけない。最も崇拝すべき女よ、私の不幸な状況を、私の絶望を考えよ。私のソフィアよ、私が今こうしているようにあなたの足元に身を投げることを許される最もはかない希望をもし喜ぶことができたなら、最も厳しい節操でも非難できる考えを鼓舞したのは、どんなほかの女にもできないことだった」と(Ⅳ-4) (18-12)。

(jjj) ジョーンズとソフィアが結婚したあと、二人と老人(ウェスタン氏)について作者は述べる。

ジョーンズはソフィアを喜ばせることの次に、最高の満足の一つは老人の幸福に貢献することであると言ってソフィアを得心させた(Ⅳ-4) (18-the last)。

(111) 結論として作者は述べる。

この優しい二人ほど価値ある夫婦は発見されないように、この夫婦ほどしあわせだと想像できるものはいない。二人はお互いに対して最も純粋で最も優しい愛情を持ちつづけているし、その愛情はお互いに慕い合いお互いに尊敬することによって日毎に増大し確かになっている。そしてまた親類や友人に対するのにも劣らないぐらいに優しいものである。二人より身分の低い人々に対する謙譲、寛大、慈善はすばらしいので、ジョーンズ氏とソフィアが結婚した日を一番満足して祝福しない人は隣人の中にも借家人の中にも召使いの中にも一人もいない(Ⅳ-4) (18-the last)。

6. おわりに

ヘンリー・フィールディングの小説である『トム・ジョーンズ』を4回に分けて例証して来たものを一つに抄出したが、全部で18巻196章から成る物語の中で作者は何を描きたかったの

か。

まず 18 世紀のイギリスの上流社会の人々、特に理想的な若い男女が結婚するまでの波瀾万丈の人生模様を描きたかったのであろう。

次に善人を描こうと思ったのであろう。善人と言っても全く非の打ちどころのない、善の塊のような人間ではなくて、喜怒哀楽に富んだ人間、時には悪いこともする人間を描こうとした。

三番目に人間の自由、特に女の自由、伝統や慣習に束縛されない人間の自由、道徳や宗教からの自由を描こうとした。

四番目に哲学者スクエアと宗教家スワッカムが物語の中に登場するが、この二人に対抗して作者自身の哲学と宗教を描きたかったのかもしれない。

最後に作者の意識の中にはいつも真善美の志向と喜劇的志向があるので、どの登場人物も大抵善人として喜劇的に描かれる。真善美の反対の偽悪醜はあまり問題にされないし、更につけ加えると、聖と俗の聖の方が強調される。死より生の方が、過去より未来の方が強調される。

以上、作者の創作の意図を五つあげたが、しばらく時間をおいて読みなおすと、また何か発見できるそんな作品が『トム・ジョーンズ』だと思う。

(2000 年 5 月 8 日受理)